



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	中島敦「李陵」研究
Author(s)	小澤, 保博
Citation	琉球大学教育学部紀要(82): 37-62
Issue Date	2013-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26595
Rights	

中島敦「李陵」研究

小澤 保博*

A study of Note on A. Nakazima's *Li Ling*

Ozawa Yasuhiro*

1

中島敦「李陵」典拠に就いて、佐々木充「中島敦の文学」（「桜楓社」昭和四十八年六月）に作品全編に亙る詳細な解説があり、画期的である。最近この先駆的な研究を踏襲し、新発見の中島敦草稿の読み解きで村田秀明「中島敦『李陵』の創造」（「明治書院」平成十一）は、新機軸の展開を見せた。佐々木充「李陵」典拠研究は、要領を得ており、作品「李陵」全編を詳細な段落に別けて解説している。この先駆的な典拠研究を検証し、多少の私見を述べて見たい。「李陵」段落は、便宜的に佐々木充研究を踏襲させて戴く。○

- ①（天漢二年秋九月、漠北、浚稽山の近くを行軍する李陵軍）。砂漠の北方を行軍して行く李陵軍の行進を広角レンズで実写した場面で「万里孤軍来たる」（高青邱「薊門行」第四句「萬里孤軍来」以外は、作者の創造であるという。⁽¹¹⁾
- ②（漢代史における匈奴の漠北侵略と漢の対策）。「漢南に王庭無し」（「史記」匈奴伝）以外は、「史記」漢書「匈奴に関する一般的な知識」⁽¹²⁾
- ③（李陵輜重を嫌い、陽動作戦部隊として出撃することを乞い、許されること）。⁽¹³⁾
- ④（路博徳の無用の上書により李陵武帝の怒りを買ひ、一層危険な使命を受けること）。③④は、「李陵伝」（「漢書」）に拠る。⁽¹⁴⁾
- ⑤（武帝の性格）。⁽¹⁵⁾
- ⑥（李陵軍の偵察ぶり）。前半部分は、「李陵伝」に拠り後半箇所は、作者の創作。⁽¹⁶⁾
- ⑦（当時の漢軍と匈奴軍の位置状況について）。作者の創作。⁽¹⁷⁾

- ⑧（夜中の怪しい光について）。作者の創作。⁽¹⁸⁾
- ⑨（翌朝の第一回目の戦闘）。「李陵伝」に拠る。⁽¹⁹⁾
- ⑩（李陵軍の後退と匈奴騎兵の追撃）。作者の創作。⁽¹¹⁰⁾
- ⑪（李陵軍の被害状況と軍中に潜んでいた女達の処刑）。共に「李陵伝」に拠る。⁽¹¹¹⁾
- ⑫（沼沢地での火戦、単于落馬）。「李陵伝」に拠りながら、作者独自の創作。⁽¹¹²⁾
- ⑬（捕虜の口から漏れた匈奴首脳陣の作戦）。「李陵伝」に拠りながら、作者の加筆。⁽¹¹³⁾
- ⑭（管敢、裏切ること）。「李陵伝」に拠る。⁽¹¹⁴⁾
- ⑮（李陵軍の死闘）。「李陵伝」に拠る。⁽¹¹⁵⁾
- ⑯（李陵、単于刺殺を企てるが成らぬこと）。「李陵伝」。⁽¹¹⁶⁾
- ⑰（李陵軍の最後の敵中突入と李陵失神して匈奴に捕われること）。「李陵伝」。⁽¹¹⁷⁾
- ⑱（李陵軍敗北の報に接した武帝の態度について）。「李陵伝」の書き換え、「史記」（「武帝本紀」）の武帝の横顔の点描。⁽¹¹⁸⁾
- ⑲（重臣会議の雰囲気）。「李陵伝」「文選」（「任少卿に報ずる書」）「史記」（「酷吏列伝」）の杜周の言動を参照。⁽¹¹⁹⁾
- ⑳（帝の下問に対する太史令司馬遷の返答と佞臣の陰謀）。「李陵伝」「任少卿に報ずる書」、章全体は、前者に拠りながら司馬遷の胸中の吐露は、後者に拠る。⁽¹²⁰⁾
- ㉑（司馬遷に対する武帝の処置—宮刑）。「李陵伝」に拠るが、多少の書き換え。⁽¹²¹⁾
- ㉒（宮刑なるものの説明と司馬遷の人となりについて）。作者の創作。⁽¹²²⁾

* 国語教育教室

- ②(司馬氏の家計と父の遺言)。「史記」(「太史公自序」)に拠る。⁽⁴¹²³⁾
- ③(「史記」の編纂に当たっての司馬遷の心理と態度)。「太史公自序」「論語」(述而)。⁽⁴¹²⁴⁾
- ④(受刑後の司馬遷の心理描写)。「任少卿に報ずる書」に拠る。⁽⁴¹²⁵⁾
- ⑤(自殺への誘惑を妨げたもの)。「任少卿に報ずる書」に拠る。⁽⁴¹²⁶⁾
- ⑥(再び「史記」を書きつく司馬遷の苦悩)。「任少卿に報ずる書」に拠る。⁽⁴¹²⁷⁾
- ⑦(捕われた李陵の心理と匈奴の中における彼の位置)。李陵「蘇武に答ふる書」「李陵伝」に拠る。⁽⁴¹²⁸⁾
- ⑧(左賢王との友情)。作者の創作、「李陵伝」。⁽⁴¹²⁹⁾
- ⑨(公孫敖の言により李陵一族族滅されること)。「李陵伝」に拠る。⁽⁴¹³⁰⁾
- ⑩(それを伝え聞いた李陵の感乱)。「李陵伝」「史記」(「李將軍列伝」)に拠る。⁽⁴¹³¹⁾
- ⑪(平静に返った彼の心理)。「李陵伝」に拠る。⁽⁴¹³²⁾
- ⑫(蘇武捕われのいきさつ)。「蘇武伝」に拠る。⁽⁴¹³³⁾
- ⑬(李陵、単于の命を受けて蘇武に会うこと)。「蘇武伝」と作者の創作。⁽⁴¹³⁴⁾
- ⑭(李陵、蘇武に負い目を感じること)。「蘇武伝」からの示唆。⁽⁴¹³⁵⁾
- ⑮(武帝の死—蘇武の慟哭と李陵の懐疑)。「蘇武伝」と作者の創作。⁽⁴¹³⁶⁾
- ⑯(和睦の漢使来たり、帰国を勧めるが李陵断わること)。「李陵伝」に拠る。⁽⁴¹³⁷⁾
- ⑰(蘇武の帰国)。「蘇武伝」と作者の創作。⁽⁴¹³⁸⁾
- ⑱(史記撰筆の司馬遷・その死)。作者の創作。⁽⁴¹³⁹⁾
- ⑲(その後の李陵)。「李陵伝」「漢書」(「匈奴伝」)に拠る。⁽⁴¹⁴⁰⁾

2

今私は中島敦「李陵・弟子・名人伝」(角川文庫)を手に行っているが、これには他に「山月記・悟浄出世・悟浄歎異」を収録する。これらの作品が、客観的に見て中島敦の代表作と言えそうである。私見では、「牛人・盈虚」をこれに加えたい誘惑を覚えるが、いずれも支那古典を素材にした人間、あるいは歴史に関する眺望である。即物的、客観的な主観を排した史上の人物造型であるなら資料に拠る文学作品は多くあり、あまり読者の共感を得る事は

ない。資料に拠りながら主観の流露に中島敦の文学の真髓があると見なくてはならない。作者自身それを十二分に認識していた事は、「李陵」(二)で「史記」執筆中の司馬遷の胸中の吐露の形式を借りて記述されている。⁽⁴¹¹⁾

初期の未完の大作「北方行」は、後年の完成品「李陵」の青写真とも言うべき作品である。作者の精神と肉体の双方の分身である二人の人物、黒木三造とその従姉である未亡人前川柳子、そしてこの人妻との情事に不安を払拭する折毛伝吉の登場である。⁽⁴¹⁴²⁾三人は自身の不安を抱えながら、相互に密接な関係を持ち南京政府による北伐の動乱の支那大陸を舞台に行動する。⁽⁴¹⁴³⁾

芥川龍之介「支那遊記」の潜在的な影響を受けながら書かれた作品「北方行」、北伐動乱の支那を舞台に三人の登場人物が繰り広げる行動的なロマンを描きながら、作品は登場人物が北京に集結する所で中断する。この意欲作品の中断、破棄の経験を経て「李陵」は、生まれた。時局に迎合した作品、いわゆる後年の戦記小説を書く事の危険性、作品自体が短期間に古色を帯びる事に中島敦は、早くに気づいていたと思う。⁽⁴¹¹⁾

3

「李陵」(「漢北悲歌」)に登場する三人の人物、李陵、司馬遷、蘇武は「史記」において最も知られた人物である。作者の脳裏にあってこれら古代支那の人物を配置して一種のロマンを創作する事は容易であつたはずである。作品構図は、数年前に執筆し中断した作品「北方行」を模倣すればよかった。数千年以前の古代支那、漠北の地で繰り広げられた歴史ロマんに活力を与えたのは、同時代の日本が直面した時局である。

第一の分かりやすい実例は、蘇武である。漢の武帝の命令により、辺境匈奴に使節として派遣され、そのまま捕獲され幽囚の身に落ちながらも肉体、精神共に屈することなく無事、中華秩序の内部に帰還する。「漢書」に記録された蘇武に就いて、最初に考えて見る。蘇武は、李陵が匈奴に下る一年前に捕虜交換の平和使節の代表として匈奴に赴き、手違いが生じて敵匈奴の捕虜となったのである。ただ一人降服を肯んじない蘇武は、自害を企てるも奇跡的に生還する。中島敦は、「漢書」の記録の通り

にその治療法を記述する。「地を掘って坎をつくり燧火を入れて、その上に傷者を寝かせその背中を踏んで血を出させた」(「李陵」三)と云うものである。⁽⁴¹⁴⁵⁾時の匈奴の君主であった且鞮侯单于是、既に匈奴に寝返って厚遇されていた衛律を派遣して、匈奴世界に服することを説得するも失敗する。衛律の父は、胡人であるが友人李延年为武帝により殺害させたのを目撃して匈奴に下っていた。つまりこの時点で中華社会を離脱し、中華教徒であることを放棄していた人物である。匈奴の人間と化した衛律にとって中華教徒である蘇武への匈奴社会に同化させる進言は、言うまでもなく失敗する。「窖の中に幽閉されたとき旃毛を雪に和して喰いもって飢えを凌いだ話や、ついに北海(バイカル湖)のほとり人なき所に徙されて牡羊が乳を出さば帰るを許さんと言われた話」(「李陵」三)という記述は、作者の「漢書」からの引き写しである。⁽⁴¹⁴⁶⁾漢の武人李陵と原野で友情を結んだ且鞮侯单于の長子左賢王が、父の跡を継いで孤鹿姑单于となり新单于の命により李陵は、北海に孤独に生きる蘇武との再会を果たす。

漢の武帝の宮廷で互いを認識しあっていた者同士が、数十年を閉じて北海の辺の小屋で再会を果たす。李陵が丁盞族の案内人に導かれて辿るのは、以下の如き経路である。「姑且水を北に溯り郵居水との合流点からさらに西北に森林地帯を突切る。」(「李陵」三)、⁽⁴¹⁴⁷⁾ほぼ同時期に匈奴に捕獲された者同士の再会である。一人は已む無く中華教徒を捨て中華社会に背を向けた者、もう一方は辺境にあって中華社会を保持し続ける者である。二人の微妙な関係に就いて作者は、鋭く指摘している。「蘇武の己に対する態度の中に何か富者が貧者に対するときのような一己の優越を知ったうえで相手に寛大であろうとする者の態度を感じはじめた。」(「李陵」三)。⁽⁴¹⁴⁸⁾

蘇武に就いて考察するに問題になる命題の第一は、中華社会からの離脱する事の困難さで、この問題は李陵の置かれた立ち場と表裏一体である。命題の第二は、社会基盤の根幹を成す命令と服従の問題である。胡人との混血で容易に匈奴社会に溶け込んだ衛律は、且鞮侯单于の助言で蘇武を匈奴社会に同化させようとして失敗した。真に止むを得ない事情で匈奴に同化した李陵の説得を以ても

蘇武の同化説得は、効を奏しない。蘇武が信奉する中華社会とは何か、この辺にも、人間が帰属する社会秩序に対する根本的な懐疑がある。⁽⁴¹⁴⁹⁾武帝から授かった使節の象徴である節旄を抱えて北海の辺で朽ちる覚悟である。こうした蘇武の生き方を目撃して転向者である李陵は、深刻な懐疑の念に陥るのである。「蘇武の存在は彼にとって、崇高な訓誡でもあり、いらだたしい悪夢でもあった。」(「李陵」三)。武帝崩御の知らせを受けて全身全霊で悲嘆に暮れる蘇武を目撃して李陵は、深刻な懐疑に陥るのである。武帝の命を受け、敵匈奴に派遣された蘇武は、後継者である昭帝に依る帰還命令で祖国漢に戻る。蘇武の祖国帰還を目撃し、李陵は述懐する。「天はやっぱり見ていたのだという考えが李陵をいたく打った。見ていないようできて、やっぱり天は見ている。彼は肅然として懼れた。」(「李陵」三)。この場合問題になる天とは何かであるが、具体的には中華社会の頂点に立つ者の謂いである。漢帝国の皇帝が、蘇武を中華社会に復帰させたということである。命令と服従の課題で考えれば、蘇武は武帝崩御後にその後継者、中華社会の体現者の命で祖国に復帰した訣である。⁽⁴¹⁵⁰⁾

蘇武は、苦節十九年の匈奴での虜囚生活を経て後に、彼を辺境匈奴の地に派遣した所の中華社会に復帰し、漢帝国の一員として天寿を全うする。歴史的には、騎馬民族匈奴はその後に南北に分離し、南匈奴は騎馬民族の特性を喪失し農耕民族たる中華社会に吸収され雲散霧消する。北匈奴は騎馬民族として遊撃生活の後にフン族になったという説もある。

4

李陵造形に力預かったのは、昭和十年代のシェトフの不安の哲学の反指定として一世を風靡した行動哲学である。しかしながら中島敦造形の李陵は、当時の戦争文学とは一線を画する。素材を「史記」に拠りながら歴史素材を造形する安易さを逃れているのは、中島敦自身が十ヶ月に及ぶ南洋体験を経ての作品造形であった事が預かっている。且鞮侯单于の長子である左賢王、後の孤鹿姑单于是漢の公孫敖を撃破する。漢に帰還後に公孫敖が、敗北の言い訳を李將軍の軍事指導の為と弁明した所から李陵の悲劇が始まる。⁽⁴¹⁵¹⁾長安在住の

李陵の一族誅殺の結末を聞いて李陵の深刻な自己反省が成される。匈奴に降服して軍事指導を成した李緒との誤認であるとしても、祖父李広や叔父李敢の最期を思い呆然とする。「最後に彼は大將軍衛青と衝突した。さすがに衛青にはこの老将をいたわる気持はあったのだが、その幕下の一軍吏が虎の威を借りて李広を辱しめた。」「李敢の最後はどうか。彼は父將軍の惨めな死について衛青を怨み、自ら大將軍の邸に赴いてこれを辱しめた。大將軍の甥にあたる嫺騎將軍霍去病がそれを憤って、甘泉宮の獵のときに李敢を射殺した。」「(李陵)三)、こうした過去の家族の歴史がさらに武人である李陵の個性が、最終的に匈奴同化を成した。

漢王朝の体制そのものが、司馬遷や蘇武の生存を許容する気質であり、武人たる李陵の行為を容認しない物があつた。漢帝国成立時に漢の高祖は、武力で項羽に敗北しながら調停で中原に覇を唱えた。武力で政敵を打倒した韓信は、最初に反逆罪で処刑されている。漢王朝の体制に佞臣が、暗躍する要因があつたと言える。文人たる司馬遷、蘇武は農耕社会である漢帝国の内部で人生を全うしたが、武人たる李陵は騎馬民族である匈奴内部に生を求めて行ったと言える。⁽¹⁵²⁾

「李陵」に就いては、獨創性が乏しく全体的に一篇の歴史的な鑑賞であるという識者の批判がある。しかし、作品「李陵」の主題の一つが、李陵の匈奴社会に同化して行く過程にある事は確かだ。先祖伝来の慣例に沿って生誕の地で生きてきた者が、異民族社会に痛みを以て同化して行く。この種の複眼的な思考を可能にしたのは、作者である中島敦の履歴である。埼玉県久喜町で生育するも、父の転勤に伴って奈良県郡山町、静岡浜松市、さらに朝鮮京城そして東京である。後年南洋から妻子宛て、転校直後の息子の学業の進捗状況を按ずる書簡を書いている。こうした経歴を有する中島敦は、「史記」の李陵を造形するに痛恨の痛みを以て人物造形を成した。意識が、匈奴社会を拒否しながらも肉体が現実と同化して行く過程を描ききる事に成功した。

李陵自身が、納得させられた且鞮侯单于の言葉に以下の文言がある。「漢人のいう礼儀とは何ぞ？醜いことを表面だけ美しく飾り立てる虚飾の謂ではないか。」「ただ漢人はこれをごまかし飾るこ

とを知り、我々はそれを知らぬだけだ」(「李陵」三)、⁽¹⁵³⁾しかしこの且鞮侯单于の言葉を李陵が納得するためには、数十年に及ぶ匈奴での衣食住の生活実感を必要とした。「初め一概に野卑滑稽としか映らなかつた胡地の風俗が、しかし、その地の実際の風土・気候等を背景として考えてみるとけっして野卑でも不合理でもないことが、しだいに李陵にのみこめてきた。」「(李陵)三)」という認識である。この李陵の認識の裏面には、十ヶ月に及ぶ痛恨の中島敦の南洋体験があり、高温と多湿で思考能力を奪われ、知的生活を成し得なかつた作者の無念の思いが、横たわっている。私的な体験でも食生活、飲料水の劣悪な事、さらに高温多湿な風土であっても読書、外国語学習は可能である。しかし、執筆活動とそれに付随する著述方面の創作行為は、絶対に不可能であると断言できる。「光と風と夢」では、R. Stevensonは、南洋サモア諸島での旺盛な執筆活動を成すも、中島敦のある種の錯誤があるように思う。作者が依拠したR. Stevenson“Vailima Letters”にそうした記述があるのだろうか。

以下、李陵が匈奴社会に同化し、その対極として蘇武が最終的に漢帝国に帰還した事の意味を考察する。「李陵」では、作者は匈奴社会に生きる李陵に対して祖国に復帰する蘇武を勝利者として記述している。「天はやっぱり見ていたのだという考えが李陵をいたく打った。」「(李陵)三)」とある。この場合、李陵に取って天とは、漢帝国の社会秩序という事になる。李陵と蘇武の二人は、共に漢帝国から厚遇されたとは言い難い処遇を受けて来た。しかし、蘇武は漢帝国の秩序に属すること以外に発想はないようだ。その理由の第一は、武人である李陵には定住する事無く拡散し、移動する騎馬民族社会に違和感が比較的になかつたと言える。「家は絨帳穹廬、食物は羶肉、飲物は酪漿と獸乳と乳酪酒。着物は狼や羊や熊の皮を綴り合わせた旃裘。牧畜と狩獵と寇掠と、このほかに彼らの生活はない。」「李陵には土地は与えられない。单于麾下の諸将とともにいつも单于に従っていた。」「(李陵)三)、この種の生活は武人である李陵に取っては安易な生活であつたが、文化人である蘇武には耐え難いものであつたろう。漱石、鴎外の両文豪の海外生活を一見しても、軍人たる鴎外に取って衣食住の不如意は、日々の軍務に紛れて末梢的なものであつた

可能性がある。漱石の英語が、最後まで学術的なものであったのに反して、鴨外の独逸語は、実践的なものであった。留学先の食物、女性に至るまで二人の接触の程度の違いは、両者の運動神経の相違であった。長安の一族抹殺の報に接した李陵は、軍馬を駆って疲労を求めて疾駆する。「考えることの嫌いな彼は、イライラしてくると、いつも独り駿馬を駆って曠野に飛び出す。」「疲労だけが彼のただ一つの救いなのである。」「(李陵)三)。第二の理由は、軍人である李陵に思索と思考は無縁である。「考えることの嫌いな彼」という人物像が、説明されている。戦前の日本陸軍を罵倒したのは、集団生活で私生活を奪われた知識人である。拡散する騎馬民族を崩壊させたのは、オカルト的な宗教であるが、宗教、学問、思惟とは無縁な行動の人である李陵はこうした属性とは無縁であった。第三は、匈奴社会全体が軍人社会で李陵に生活での違和感が無かった事がある。「陵が厚遇を受けるのは、彼が強き者の子孫でありまた彼自身も強かったからである。食を頒けるときも強壯者が美味をとり老弱者に余り物を与えるのが匈奴のふうであった。」「生みの母に対する尊敬だけは極端に男尊女卑の彼らでも有っている」(「李陵」三)、弱者や女達の存在感の希薄な社会は、文化保持能力に欠ける。護雅夫「李陵」(「中公叢書」昭和四十九年一月)には、近年発見された「李陵の宮殿」の記述がある。遙か千五百年後のチングスカンの墓も所在不明である騎馬民族にあって、李陵の痕跡が発見されたという説は、眉唾の話ではないかと思う。第四としては、成熟した漢帝国は、武人そのものが無用になった。拡散する匈奴社会は、有用な武人を必要としていた。軍人として有能な李陵は、武帝の命令よりも且鞮侯单于の命令の方が体質に合っていたと言える。事実、武帝が武人として信頼した衛青と霍去病は、近親者が武帝の寵愛を得ての信頼である。(武帝陵の傍らに霍去病の墳墓は、今も現存している)。第五の理由は、結局軍人たる李陵は移動する匈奴の群れに同伴出来たが、文人たる蘇武には無理であったという事である。騎馬民族社会に同化した李陵と農耕民族社会に復帰した二人の晩年は、互いの運命を象徴している。匈奴と同伴した李陵の痕跡は、歴史に残らなかったが蘇武は、武帝の代わりに天命を授けられた昭帝の御代に救済され、次の宣帝により爵位

を受け麒麟閣に肖像画を残した。李陵は元平元年(紀元前七四)に匈奴軍中に没したという記録しか残らなかった。第六の理由、最終的な結論は両者の気質の違い、体質の相違という事にならないか。蘇武は、嫉妬と中傷が渦巻く漢帝国帰還以外念頭がない。彼には、騎馬に乗り広大な辺境を移動する意欲も自信も無かったのであろう。肉体的な頑強さで李陵に見劣りしていたかも知れない。あるいは、李陵よりも年配であった可能性がある。結果的に蘇武は、老人、女を切り捨て拡散する匈奴社会を拒み続けて祖国に帰還する。

匈奴社会を拒む蘇武は、李陵に対して優越を示す。これに対して匈奴社会に同化した李陵は、終始負い目を感じている。他人の視線を意識しないでは生きられない嫉妬とやっかみの農耕社会は、文化的な保持能力で辺境の住民を屈服する能力を有する。「檻樓をまとうた蘇武の目の中に、ときとして浮かぶかすかな憐愍の色を、豪華な貂裘をまとうた右校王李陵はなによりも恐れた。」「丈夫ふたび辱めらるるあたわずと答えた。その言葉がひどく元気のなかったのは、衛律に聞こえることを惧れたためではない。」「(李陵)三)、二人の位置関係では李陵は敗北者であり、蘇武は勝利者である。何故、こうした人物構図になるのか。芥川龍之介「俊寛」を考察した折に、私は倉田百三と菊池寛の二人の俊寛像を比較した。倉田百三「俊寛」は李陵の立場に置かれた者であり、菊池寛「俊寛」は蘇武の立場に置かれた者である。都の嫉妬と嫉みの生活を捨て、健康で肉体を以て島民の生活を実践する俊寛は、文学的な感興において劣る。寸時も都の貴族社会を忘れることなく執念を秘めて朽ちる俊寛に読者が、心惹かれるのは何故か。互いの足を引っ張り合い、嫉妬と嫉みの農耕民族社会の濃厚な人間生活を離れては、幸福は無いというのが一般的な日本人の生活感覚かも知れない。倭寇の昔から、日本人は占領地の朝鮮、中国、東南アジアに住み着く習慣はなかった。その後の文禄、慶長の役では多くの将兵は疫病と食料の不如意に苦しんだ。一言で言えば、飲料水において日本列島は優れていて、疫病、風土病を豊富な水量で洗い流して結果的にアジアで唯一奇跡的に恵まれた住環境であった。現在でも朝鮮、中国、東南アジアに住み着く日本人は例外であり、一時的な現象である。

5

「李陵」(二)は、李陵投降の報に接して彼の為の弁明を成した司馬遷の運命を記述する。父司馬談は歴史記録の為に資料蒐集で人生を終わり、志を息子司馬遷に託した。司馬遷「史記」が、精彩を放っているのは司馬遷の青年期の全国行脚による資料蒐集である。司馬談は、武帝の皇帝即位式である泰山での秘密儀式に参加できず亡くなった。泰山での皇帝即位式は、秦の始皇帝より始まるも正式な様式は、誰もこの時に進言出来なかった。宮刑、別名腐刑に遭遇した司馬遷が、「史記」完成に意を注ぐ過程を痛みを以て記述する。中島敦が「李陵」の創作に心血を注いでいる時に武田泰淳も「司馬遷—史記の世界—」(「日本評論社」昭和十七年十二月)の執筆に没頭していた。前者は、十ヶ月の南洋体験の痛みを背理にして古代支那世界を体験し、後者は支那大陸での過酷な一兵士としての経験の内秘めていた。武田泰淳は、夭折した中島敦を後年偲びながら、文章において自分は及ばないと述懐している。「李陵」(二)で生彩を放っているのは、実作者たる中島敦が仮託した司馬遷の創作手法に就いての述べた感想の箇所である。図らずも中島敦自身の創作手法の変遷を見せていて興味深い。「光と風と夢」でR. Stevensonの口を借りて展開される作者の創作手法の延長である。これは、作者自身が嘗て東大国文科で戦前では珍しかった近代文学を専攻した学習の名残を感じさせる一文である。

性格の内視心理的小説と呼称する作品がある。何とうるさいことだ、と私は思ふ。何の為にこんなに、ごたごたと性格説明や心理説明をやってみせるのだ。性格や心理は、表面に現れた行動によつてのみ描くべきではないのか？(中略)さて、また一方、ゾラ先生の煩瑣なる写実主義、西洋の文壇に横行すと聞く。目にうつる事物を最大洩らさず列記して、以て、自然の真実を写し得たりとなすとか。その陋や、晒ふべし。(「光と風と夢」五月×日)

前者は、当時そして現在の日本の文壇で主流を成す私小説に関する見解であり、後者は初期の永井荷風が学習し、その後の日本文壇を席卷した自然主義文学に就いての中島敦流の持論である。日本近代文学の学習を経て「李陵」の文体にたどり着

いたと言える。司馬遷は、「史記」執筆の過程で自身の文体、紀伝体で記述される歴史上の人物に就いて「述べて作らず」と言っている。司馬遷「史記」執筆の折に念頭にあったのは、「春秋」であり「左伝」「国語」であった。これら前例の執筆方法、いわゆる編年体に挑戦し、煩悶する司馬遷の胸中を写し取っている。

武帝皇帝臨席の御前会議で司馬遷は、敵匈奴の手に落ちて捕虜になった李陵を弁護し、最終的に宮刑の処分を受けるのである。「酷吏として聞こえた一廷尉が常に帝の顔色を窺い合法的に法を枉げて帝の意を迎えることに巧みであった。(中略)前主の是とするところこれが律となり、後主の是とするところこれが令となる。当時の君主の意のほかになんの法があろうぞと。」(「李陵」二)⁽⁴⁵⁾

受刑後の司馬遷は、「史記」執筆に全力を傾ける事になる。父からの遺言である「史記」完成を急ぎ、自殺の自由を得る為にである。「知覚も意識もない一つの書写機械にすぎぬ」「生きることの喜びを失いつくしたのちもなお表現することの喜びだけは生残りうるものだということを、彼は発見した。」(「李陵」二)、こうして「作ル」事を警戒し、「述ベル」事だけに意を注いだ独自の紀伝体の歴史書が誕生する。「李陵」(二)で紀伝体「史記」執筆に向かう司馬遷の創作態度は、十ヶ月の南洋体験を経て、彼本来の自意識を喪失して、歴史の永遠に接した中島敦本来の創作態度に重なる。史実の私的な解釈を排した、彼独自の歴史小説の展望を垣間見せるのである。南洋帰還後の一年に満たない期間、「李陵」「弟子」を書き上げた時間は、近代文学史を眺望すれば樋口一葉の最晩年の奇跡の執筆活動を偲ばせる。

6

今日「李陵」を読むと幾つかの問題点が、浮かび上がる。社会秩序を成す命令と服従の課題、異文化接触の課題、組織と個人の課題、農耕民族と騎馬民族の相違、人的交流の問題等である。命令と服従、漢帝国が武帝の時代に隆盛を極めたのは、命令と服従の上下関係が緊密であったからである。武帝の命を受けた李陵は、蘇武と同じように命令者たる武帝の後継者たる者により、命令解除の命令を受けるも再度漢帝国に帰還する意思を捨てた。こ

れは、あくまでの個人の素質と状況の激変に拠る。漢帝国に帰還した蘇武は、後継皇帝により爵位を授けられて一幅の肖像画を残し得た。祖国帰還を拒否した李陵は、広大な大陸を一兵士として転戦して、痕跡は歴史の彼方に消えた。ユーラシア大陸に李陵の生活跡を見出した報告は、考古学の素人である私から見て信じ難い。客観的に見て、歴史的眺望を成せば蘇武は勝利者であり、李陵は敗北者という事になる。中島敦が、「李陵」で書き残したのは彼に取って現実の組織形態である日本軍隊の問題である。戦時下の戦争文学の一時的な興奮の危険を実感したからである。それは自身の自意識の課題を「過去帳」で扱い、自意識打破の為の行動主義文学「北方行」で北伐を背景に置いた事で失敗を自覚したからである。武帝の命を受けて辺境匈奴に遠征、派遣される李陵、蘇武を描く作者の脳裏の隅には、天皇の命で広大な亜細亜地域に拡散、展開した皇軍兵士の運命が重なっている。

蘇武も李陵も命令者による解除命令を受け、前者は無事に漢帝国秩序の内部に栄誉を以て復帰する事が出来た。数百万皇軍兵士の悲劇は、祖国が敵国に占領され帰還後の祖国が、帝国日本の国体を変質していたことである。祖国を破壊し、国体を変質させる事を目的とした共産党員が、全員無事五体満足で戦後社会に復帰し、国体防衛の為に数百万皇軍兵士が異国に屍を晒し、命令者が戦後社会で回想録を執筆していた。占領軍による東京裁判は違法であるが、絞首刑で人生を終わった陸軍軍人達は、敵国の私刑に拠らなくては裁く事は出来なかった。今に至って戦後の日本人が出来る贖罪は、命令者の責任の所在を明らかにして栄誉を剥奪し、日本人自身に拠る戦犯追及を成す事である。三島由紀夫は、天皇の人間宣言に異議を唱えて「英霊の声」(「文芸」昭和四十一年六月)で命令者の神の立場の放棄を憤った。命令を順守した者が、数百万規模で白骨を異国に晒し、命令者に対して一般日本人からの報復が無かった事が、戦後日本社会の墮落を招いたと言える。命令者に対して、仮借なき処罰が必要だった。戦後社会で回想録を執筆し、昼の上で往生した命令者の立場は、陸軍大学や海軍大学、そして帝大卒の革新官僚という学歴上位者達であった。

紀元前支那での武帝の立場は、皇帝として泰山

で天命を受けたという秘密儀式により、齎された物だ。帝政廃止後の皇帝権限を譲与された者は、共産党主席である。共産中国の北京で物乞いをする愛新覚羅一族、皇位継承者の挿話を讀んだ記憶がある。漢帝国の武帝の行使した私的な権限は、現在の支那でも継承され存続している。数千年を閲して継承された皇帝権威が、民主主義形態に変貌する事は今後も可能性がないと言える。^(41.55)

異文化接触の課題、あるいは人的交流の問題である。戦前、多くの日本国民が生誕地で育ち、その地で没していた時に中島敦は、転勤により異文化接触を成した少数者であった。戦前の朝鮮、満州の地を肌で知っていた彼の作品「巡査の居る風景」「D市七月叙景(一)」「虎狩」「光と風と夢」は、主題として人種問題を扱っていて「李陵」の主題に重なる。「歐羅巴の豚のやうな・文明のために去勢されて了つたものとは、全然違ふ。實に野性的で活力的で逞しく、美しいとさへ言つていいかも知れぬ。私は今迄豚は泳げぬものと思つてゐたが、どうして南洋の豚は立派に泳ぐ。」(「光と風と夢」一八九〇年十二月×日)、これは戦前素朴進化論が、世界を支配していた時代に日本人である中島敦が、英国人作家の口を借りて人種進化論を打破している場面である。会田雄次「アロン収容所」でも捕虜になって強制労働に従事する白人を目撃して、驚く記述があった。数百年、亜細亜に君臨して権力を駆使して支配した白人達が、集団で日本人に投降する姿を目撃した現地人の驚愕、嗟嘆の姿の前兆の記述である。「光と風と夢」が、芥川龍之介文学賞候補作に成った時、英訳して欧米人に読ませたいと言った久米正雄の感想を想起させる。

当時の平均的な日本人としては、外地の生活の劣悪な事を熟知していた筈の中島敦であるが、転地療法を兼ねた治療の為に劣悪なる南洋諸島での一年に及ぶ役人生活を送る。南洋諸島に当時移り住んだ日本人の多くは、生活環境劣悪な沖縄からの移住者であった。彼等は、飲料水や食生活の劣悪な生地から生活の為に、南洋群島に追い遣られた連中である。生活に切迫して辺境に追い遣られた住民の中へ高給取りで、いつでも本土帰還可能な知識人が、やって来た訣である。到着直後から食料、飲料水の不如意さらには風土病の洗礼を受ける事になる。南洋庁勤務以前の作品「光と風と夢」

では、サモア諸島でR. Stevensonは著述と思索に十二分な生活を満喫している。南洋諸島での生活環境劣悪な事を記述した文献を中島敦は、見落としたか。あるいは英国北部の地で育った英国人にとって、食料、飲料水の劣悪な事が意識に上らなかったか。今日でも欧州出自の白人達は、容易に世界に拡散定住し、長期に亘る市民生活を営んでいる。飲料水、食料の貧弱な自国を離れた生活そのものが、苦痛ではないのだろうか。日本在住の朝鮮、中国人は数百万規模に及ぶが、亜細亜諸国に定住生活を営む日本人の数は、コンマ以下である。

7

「李陵」(二)に登場する司馬遷の胸中は、典拠である「漢書」を離れて作者である中島敦の個人的な人間観が吐露されている。「彼は、今度ほど好人物というものへの腹立ちを感じたことはない。これは姦臣かんしんや酷吏こくりよりも始末が悪い。少なくとも側から見ていて腹が立つ。良心的に安っぽく安心しており、他にも安心させるだけ、いっそう怪しからぬのだ。辯護もしなければはんぼく反駁はんぱくもせぬ。心中、反省もなければ自責もない。」ここで司馬遷が嫌悪しているのは、丞相公孫賀である。⁽¹¹⁵⁶⁾

姦臣や酷吏としては、杜周の名を挙げている。⁽¹¹⁵⁷⁾司馬遷を宮刑にした二人の人物の名を挙げて、事無かれ主義の宰相である公孫賀こそ悪であると断定している。悪を自覚し、自己の保身、あるいは出世の為に周囲の者を落とす杜周は許せると云う人間観は、一般的な人間認識である。比叡山で修業に励む少数の高僧の名を挙げて、焼き打ちを阻止する明智光秀に向って織田信長は、これらの少数の高僧こそが悪であると断定し、玉石共に砕くと反論した。太宰治「如是我聞」にも同趣旨の発言がある。「こつちは、本気で言ってるのだ。それこそ、も少し、眞面目になれ。私を憎み、考へよ。」(「如是我聞」二)という発言である。

典拠「漢書」を離れて、作者の個性が光っているのは、宮刑後の司馬遷の心情激白の個所である。「斬に遭うこと、死を賜うことに対してなら、彼にはもとより平生から覚悟ができていいる。」「それゆえ、彼は自らの持論に従って、車裂くるまびきの刑なら自分の行く手に思いえが画くことができたのである。」「宦者とか閹奴えんぬとかいう文字を書かなければならぬとこ

ろに来ると、彼は覚えうめず呻き声を発した。」「(李陵二)、宮刑後の司馬遷の胸中、取り分け痛恨の極みの精神的な打撃は「漢書」には、記録されなかった。ここに中島敦の個性の反映がある。実母との別離、さらに父の転勤により内地と朝鮮を渡り歩いた。義母に養育されての家族愛に欠けた生活、荒涼たる周囲の生活環境、肉体の移動に意識が付随して行かない不如意な生活である。肉体の行動に伴い、意識が離反している苦痛である。最初それはR. Stevensonの独白で、彼が独自の匂におに誘われてサモア島から意識が離脱して、故郷エディンバラを彷徨うというように表現される。「何といふことなしに、私は、其の通を少し行つて左へ曲れば、ヘリオット・ロウ(自分が少年期を過したエディンバラの)の我が家に歸れるやうに考へてゐた。再びアピアといふことを忘れ、故郷の街にゐる積りになつてゐたらしい。」「(光と風と夢」七月×日)、この中島敦の独断場のある肉体と意識の乖離は、彼固有の実体験に拠る。「一言葉で記憶してゐると、よくこんな間違をする。」「(虎狩」七)という実存的な思惟として表現され、「山月記」では変身として、造型される。「自分は初め眼を信じなかつた。次に、之は夢に違ひないと考へた。」という痛恨の告白になる。この主題は、最終的には「木乃伊」で極限の構想に変貌する。「李陵」の登場人物の中で辺境の匈奴社会に生きる李陵の存在が、文学で生きる司馬遷の存在を凌駕している。それは漢帝国の秩序の世界に生きて来た一人の武人が、肉体と精神の痛みを以て匈奴社会に同化して行く過程に、著者の過去の精神の変貌の足跡を垣間見せるからである。文化保持能力に欠ける騎馬民族社会は、即戦力を必要とする社会であると同時に、弱者切り捨てる武功を尊重する世界でもある。実力が有効な騎馬民族社会では、佞臣や口舌の徒の暗躍を許さない社会でもある。今日の日本で比較すれば、都市と田舎、北方と南方の地域差である。⁽¹¹⁵⁸⁾

8

「李陵」で本来ならば、主人公となるべきであった司馬遷が脇役に退き、李陵と蘇武、取り分けて李陵の存在が作品中で大きくなったのは時代の切迫と作者自身の「命終」の予感であったろう。実作者として、感情移入のし易い人物司馬遷が脇役に成

り、武人李陵の作品全面、全編に亘る主役は時代の趨勢が預かっている。こうして結果的には、「李陵」は高揚する戦時下日本の痕跡の一証明となった。「李陵」の司馬遷の項を執筆するのに中島敦が参考にした「文選」巻四十一)には、「任少卿に奉ずる書」(司馬遷)があり、ここには戦時下の帝国軍人の覚悟の一節の典拠になった有名な語句「命は鴻毛よりも軽し」(命軽於鴻毛)の一節がある。「その夜、李陵は小袖短衣の便衣を着け」(戎衣は重く濡れていた。)(「李陵」一)。前者は、「君臣の義は死よりも重く、命は鴻毛よりも軽い。」(天皇陛下の忠義は自分の死よりも大切で、命は鳥の毛よりも軽いものだ)と戦時下の日本で教えられ、後者は「華と咲く身の感激を／戎衣の胸に引き緊めて」(「出征兵士を送る歌」二)で同じく戦時下の日本で愛唱された。「李陵」一篇は「便衣」(戎衣)の語句で、大東亜戦争初戦の国民的な熱狂の片鱗を今に伝えている。⁽⁴¹⁵⁹⁾

中島敦は「北方行」で執筆時、同時並行であった北伐を遠景に持って来る事で戦争文学の危険性に気付いたのだと思う。紀元前の漢帝国の抗争劇を眺望する事で、熱狂的な歓喜の中での大東亜戦争での初戦の国民的な精神高揚劇を記録し得た。本来ならば、中華教徒として祖国に帰還した蘇武を迎える漢朝廷を記録すべきながら、異郷に埋没し、その人生を終わった李陵を描く事で、数百万皇軍兵士の運命に対して鎮魂の文学を残し得た。都に残した家族を悉く抹殺された後、敵匈奴に同化して家庭を持った李陵、「彼の妻はすこぶる大人しい女だった。いまだに主人の前に出るとおずおずしてろくに口も利けない。しかし、彼らの間にできた男の児は、少しも父親を恐れないで、ヨチヨチと李陵の膝に匍上がって来る。その児の顔に見入りながら、数年前長安に残してきた一そして結局母や祖母とともに殺されてしまった一子供(おむこ)の佛をふと思いうかべて李陵は我しらず無然とするのであった。)(「李陵」三)、この一文は図らずも大東亜戦争で亜細亜各地に散って行った無数の皇軍兵士の激変の人生を暗示している。文学の世界では、終戦直後に戦争未亡人と心中して果てた後輩太宰治を悼んで、川端康成「山の音」では復員軍人の息子に何も言えない父親を描いている。中島敦「李陵」、川端康成「山の音」共にさり気なく国家に翻弄される男

達の家庭の問題を描いている。

既に考察して来た如く中島敦「李陵」は、司馬遷「史記」を素材としてあまり使用していない。主たる素材は、班固「李陵伝」(「漢書」巻五十四)、司馬遷「任少卿に奉ずる書」(「文選」巻四十一)、「蘇武伝」(「漢書」李広蘇建傳、巻五十四)、「李將軍列傳」(「史記」巻四十九)、「蘇武に答える書」(「文選」)等を使っている。「李陵」の主要な登場人物、李陵、蘇武、司馬遷の三人の運命に与っている漢帝国の国家意思は、一体何か。「天はやっぱり見ていたのだという考えが李陵をいたく打った。」「蘇武は南に向かって号哭した。)(「李陵」三)「我あり」(「李陵」二)、三人はそれぞれ各自天に向かってひれ伏している。孫樹林「李陵」論「近代文学試論第四十」(「広島大学近代文学研究会」平成十四年十二月)に拠れば、漢の武帝の国家意思決定は、儒学者董仲舒に拠って成された。この人物は、「漢書」(「董仲舒傳」)に紹介がある。⁽⁴¹⁶⁰⁾

中国文学者の高島俊男の一連の随筆「お言葉ですが・・・・」には、中島敦の支那素材作品を取上げている。「父祖傳來の儒家に育つた」(「狼疾記」)中島敦であるが、その漢籍に関する基礎知識は、専門研究者から見れば素人芸であるという物である。「特集 中島敦」(「ユリイカ」昭和五十二年九月号)で中国文学者駒田信二は、中島敦の支那素材作品は、素人でしか書けないと寸評した。専門研究者の清朝考証学のような学術論文執筆者にはない、新鮮な驚きがあり、それが創作行為に走らせたという意見を述べている。ニーチェ「ツァラトゥストラはこう言った」に、学問研究を極めると芸術的な想像力は衰退するという印象的な一文があった。貝塚茂樹「史記—中国古代の人びと」(「中公新書」)、吉川幸次郎「漢の武帝」(「岩波新書」)、護雅夫「李陵」(「中公文庫」)、武田泰淳「司馬遷—史記の世界」(「講談社文庫」)等の戦後の「漠北悲歌」に纏わる歴史的な学問書は、明らかに戦中の中島敦「李陵」に触発された物である。

漠北の地で紀元前に繰り広げられた男達のドラマを再現する事で、中島敦「李陵」は今日、異国に散った帝国軍人の運命を偲ばせる。非転向の蘇武に引けめを感じる李陵は、戦前共産党からの転向者の自賁の姿に重なる。命令と服従の秩序の内部に生きる者のみ、精神の安定が得られ、転向した者に静

謚な生活がないという課題を提示して見せた。遠藤周作「沈黙」の主題に重なる問題である。ちなみに神父養成の為の肉体と精神の修練の過程は、ナチス親衛隊の特殊訓練に取り入れられ、共産党員の思想訓練にも多大な影響を与えた。戦後、数十年ぶりに発見され祖国帰還を成した皇軍兵士、軍籍離脱の暴露を恐れて偽名で米国に生き続けた独逸国防軍兵士の悲劇など、辺境匈奴の地に没した李陵の運命は今日の問題である。戦前、多くの日本人が生誕地で生き、死んで行った時代に外地育ちで、複眼的に思考を持った中島敦は、予言的かつ先駆的予感で民族と国家に翻弄される皇軍兵士の運命を「李陵」で描いたと言える。

(註1) 高青邱「薊門行」(行行、光祿の塞、望望、單于の庭。／天寒くして水草盡き、萬里孤軍來る。／中國に荒土多し、窮邊、何ぞ開くを用ひむ。)/佐々木充「中島敦の文学」は、第三句「天寒くして水草盡き」が、情景描写に示唆を与えたとし、第四句「萬里孤軍來る。」はそのまま「李陵」(一)に使われたとした。「李陵」(一)で課題となる高青邱の詩句と辺境の地名に就いては、村田秀明「中島敦『李陵』の創造」に「高青邱詩集一」(續國譯漢文大成)の中島敦蔵書での確認がある。都長安を立出し、辺塞遮虜障に集結し、陣營を整えて漠北浚稽山の麓で休息する。漢塞居延からも遠く、匈奴の勢力圏である。

(註2) 「漠南に王庭無し」(砂漠の南に匈奴王の庭無し)は、「史記(四)」(國譯漢文大成)に拠る。匈奴の来襲地漠南の地名は、「五原・朔方・雲中・上谷・雁門」さらに漢代の年号「元狩以後元鼎」は、村田秀明「中島敦『李陵』の創造」に『『李陵』年表』(第三章)『『李陵』地図』(第四章)の研究調査がある。匈奴侵略の漢代史の一般的な知識の羅列、具体的には①大將軍衛青・嫖騎將軍霍去病の二人の活躍②浞野侯趙破奴の投降③光祿勳徐自為の城障の破壊④大宛遠征の武帝將軍李広利の存在。武帝の第一夫人は陳皇后で、二人は従妹同士であり子供はなかった。建元二年、武帝十八歳の年に実の姉平陽公主の計らいで衛子夫という第二夫人を得る。二人の出会いの場「軒中にて幸を得たり」(『漢書』外戚伝)とあり、軒とは後漢に出た辞書に「厠のことを或いは軒と曰う」(『釈名』)ある事から便所で最初の密会をしたと吉川幸次郎の解説にある。第二夫人衛皇后の弟が、衛青である。正妻の陳皇后の策で忙殺されそうになった衛青を助けたのが、友人公孫敖である。衛

青は、武帝の命により七回匈奴遠征を成し、成功した。衛青の甥が、霍去病で三度の匈奴遠征に功を成した。霍去病は、遠征四年後に二十四歳で病没し、渭水の辺の武帝の茂陵にある祁連山に似せた陵墓を訪れた司馬遼太郎は、若くして病没した霍去病に思いを寄せ、病身だった英雄の実情が、彼の名前に窺えるとした。「霍去病が死んでから十八年、衛青が歿してから七年。」(「李陵」一)には、天漢二年の時点での兩名の生没を正しく認識する作者の視線がある。「光祿(勳)徐自為をして、五原の塞を出づること(近きは)数百里、遠きは千余里、城鄣・列亭を築き、廬响(陰山山脈中の一峰?)に至らしむ。而して、遊撃將軍韓說、長平侯衛伉をしてその傍に屯せしめ、犂鞬都尉路博徳をして居延沢の上に築かしめたり」(『史記』四)この同じ年に浞野侯趙破奴は、二万の軍で朔方から出撃するも匈奴八万に包圍され殲滅させられる。匈奴は「光祿の築きしところの城列・亭鄣を破壊し」(『史記』四)た。

(註3) 「李陵伝」(『漢書』卷五十四)の班固の記述に沿うも中島敦「李陵」には、典拠に遜色のない独自の筆致がある。「天漢二年、武帝、三万騎に將として酒泉を出で、右賢王を天山に撃たんとし、陵を召し、武帝の爲めに輜重を將い使めんと欲す。陵、武台に召見せられ、叩頭して自ずから請うて曰わく、『臣が將いる所の辺に屯する者は、皆荆楚の勇士、奇材劍客なり。力は虎を扼し射は命ずるところに中つ。願わくは自ずから一隊に當るを得、蘭干山の南に到つて單于の兵を分ち、専ら武帝の軍に獨わ令むること母からしめん』と。上曰わく、『將悪くに相い属せんとする耶。吾れ軍を發すること多く、騎の女に予うるものなし』と。陵對う。『騎を事とする所無し。臣願わくは少を以て衆を撃たん。歩兵五千人もて單于の庭に涉らんと。上、壯として之れを許す。』(『李陵伝』)。

(註4) 「因りて犂鞬都尉路博徳に、詔して兵を將い半道に陵の軍を迎えしむ。博徳は故の伏波將軍なり。亦た陵の後距と爲るを羞ず。奏して言えらく、秋に方り匈奴の馬肥え、未まだ存に戦う可からず。臣願わくは陵を留めて春に至り、俱に酒泉・張掖の騎各々五千人を將い、並びに東西の浚稽を撃たん。禽にすることを必ずとす可しと。書奏せらる。上怒る。疑うらくは、陵、悔いて出づることを欲せず、博徳に教えて上書せしむと。廼わち博徳に詔す、吾れ李陵に騎を予えんと欲せしに、少を以て衆を撃たんと欲すと云う。今虜、西河に入る。其れ兵を引きて西河に走き、鈎營の道を遮

れと。陵に詔す、九月を以て発し、遮虜の郡を出で、東浚稽山の南、竜勒水のの上に至り、徘徊して虜を覘、即し見る所亡くんば、泥野侯趙破奴の故道に従がって、受降城に抵り士を休めよ。騎置に困りて以聞(奏上)せよ。博徳と言う所の者云何ん。具に書を以て対えよと。」(「李陵伝」)。受降城とは、武帝が大初元年李陵の祖父武帝將軍李広利に大宛征伐を命じた時、匈奴からの防衛の為に因杆將軍公孫敖に塞外に作らせた。

(註5) 佐々木充に拠れば、依拠したのは「漢書」(「武帝本記」)で作者による推定の性格設定。「武帝はけっして庸王ではなかつたが、同じ庸王ではなかつた隋の煬帝や始皇帝などと共通した長所と短所とを有っていた。愛寵比なき李夫人の兄たる武帝將軍にしてからが兵力不足のためいったん、大宛から引揚げようとして帝の逆鱗にふれ、玉門関をとじられてしまった。その大宛征討も、たかだか善馬がほしいからとて思い立たれたものであった。」(「李陵」一)、以下は司馬遷「史記」(「外戚世家」)とこれを補訂した班固「漢書」(「外戚伝」)に拠る吉川幸次郎「漢の武帝」(「岩波新書」)を参考にして記述する。武帝の晩年の愛人、美人薄命で世を去った李夫人は死後に武帝に一篇の賦を「漢書」に遺さしめた。「しべを含み花びらをさしのべた花が、風を待つがごとくであった。くつろいで柱によりかかったときの流し目は、ことになやましかつた。なぜうら若い身の、なぜかくも俄かに逝いたか。なぜ臨終の床では、返事をしてくれなかつたか。」(「漢の武帝」第四章の上、四)。李夫人の死後武帝の信を得た二人の兄が李延年と李広利である。武帝將軍李広利の武帝とは、大宛国の武帝という城の名前であり、武帝城に隠されている名馬奪取の命を受けての称号である。武帝將軍の大宛国遠征は、大初元年(武帝五十三歳)で二年後に敦煌に引き返して帝の逆鱗に触れた訣である。大宛国の国都貴山城を包圍して名馬を捕獲して帰国するのは、四年後である。帰国後第一回の匈奴追討軍司令官に任命されるのは、帰国後二年後の天漢二年である。天漢三年に第二回の匈奴遠征、六年後の征和二年に第三回匈奴遠征に出て捕虜になり、殺害された。武帝將軍李広利の貴山城からの帰国後に武帝は、詔勅を下した。この詔勅は空虚で武帝の李夫人喪失の痛みと晩年の衰えがあるというのが、吉川幸次郎説である。李陵の出陣は、この武帝將軍の第一回の匈奴征伐に付随したものである。

(註6) 「三十日。浚稽山に至って止まり營す。過ぐる所の

山川地形を図きしを挙げて、麾下の騎の陳歩楽をして還りて以聞せむ。歩楽召見せられ、陵、将率として士の死力を得たることを道う。上甚だ説ぶ。歩楽を拜して郎と為す。」(「李陵伝」)を中島敦流に書き換えた後に作者の想像的な印象深い一文が、付加された訣である。「選ばれた使者は、李陵に一掛してから、十頭に足らぬ少数の馬の中の一匹に打跨ると、一鞭あてて丘を駆け下りた。灰色に乾いた渾々たる風景の中に、その姿がしだいに小さくなっていくのを、一軍の將士は何か心細い気持ちで見送った。」(「李陵」一)。引用の「李陵伝」の後半箇所は、「ただ、先ごろ李陵の使いとして漠北から『戦線異状なし、士気すこぶる旺盛』の報をもたらした陳歩楽だけは(彼は吉報の使者として嘉せられ、郎となってそのまま都に留まっていた)成行上どうしても自殺しなければならなかつた。哀れではあつたが、これはやむを得ない。」(「李陵」二)に場所を移動させて記述されている。

(註7) 漢軍と匈奴の戦況状態の作者による解説であるが、迫り来る戦闘を予見させる創作上の工夫である。①武帝將軍(李広利)は、天山で右賢王を敗北させるも帰途匈奴主力軍により惨敗する。②因杆將軍公孫敖と路博徳の二人が、西河・朔方(「阿南、オールドス」)で戦う匈奴は別部隊。③匈奴主力軍は、李陵止营地と北方鄯居水の中間地点に進出しているという李陵の予想。武帝最晩年の愛人で美人薄命で没した李夫人の兄である李広利は、大宛国の武帝城の名馬獲得後に三回の匈奴遠征を成す。第一回は、天漢二年甘肅方面。第二回は、天漢三年オールドス地区(阿南)の朔方からの出撃。第三回は、征和二年五原塞を出ての遠征である。この三度目の遠征途次で都長安で戻太子の変事を聞き、匈奴の虜囚になり殺害される。建元二年、武帝は大月氏との同盟で匈奴を遠征するために張騫を天山麓の大月氏に派遣し、元光六年に四人の將軍を遠征させる。「將軍衛青は、上谷より出でて龍城(匈奴の本拠)に至り、胡の首虜七百人を得たり。公孫敖は雲中より出でても、得るところなし。公孫敖は代郡より出で、胡のため敗れること七千余人。李広は雁門より出で、胡のために敗られ、而して、匈奴は広を生得したり。広はのちに亡げ歸るを得。漢は敖・広を(獄に)囚ぎたるも、敖・広は贖いて庶人となる」(司馬遷「史記」)。

武帝は大初元年、武帝將軍李広利をして大宛征討を計画し、因杆將軍公孫敖に受降城を築かせ、都尉路博徳をして居延沢に要塞を築かせた。(「羅雅夫」李陵)。

地図で確認すると居延沢はエチナ川が北上してガシュン湖、ソゴ湖に注ぎ込むオアシスである。「光祿(勲)徐自為をして、五原の塞を出づること(近きは)数百里、遠きは千余里、城鄣・列亭を築き、盧呵(陰山山脈中の一峰?)に至らしむ。而して、遊擊將軍韓說、長平侯衛伉をしてその傍に屯せしめ、彊弩都尉路博徳をして居延沢が上に築かしめたり」(司馬遷「史記」)。李陵止营地とは、浚稽山の麓であり鄧居水とはバイカル湖に注ぐセレンガ河である。(村田秀明「中島敦『李陵』の創造」)。中島敦所有「最近世界地図」書き込みに、バイカル湖の注ぐ鄧居水(セレンガ河)、姑且水(トラ河)、余吾水(ケルレン河)の書き込みがある。「どうしても匈奴の主力は現在、陵の軍の止营地から北方鄧居水までの間あたりに屯してゐなければならぬ勘定になる。」「姑且水を北に溯り鄧居水との合流点からさらに西北に森林地帯を突切る。」「(李陵)一、三。李陵の止营地浚稽山が現在のどこか不明であるが、李陵は居延沢を出て東北行三十日で浚稽山に到達する。趙破奴「朔北より出て二千余里にして」浚稽山に至るとあるからゴビ砂漠北辺の一山であると護雅夫は、指摘している。

(註8)「漠北の夜の星の美しさ一特に狼星は光芒を曳いて輝く、と突然、その下に赤い星が三つ四つ現われフツと消える。李陵は全軍に戦闘隊形を整えさせる。ここから李陵軍五千の歩兵と、匈奴十萬の騎兵との凄惨な戦闘場面に入る。」「(佐々木充「中島敦の文学」)。佐々木充は、「作者の場面再現的手法による創作部分」であると断定した。作者の思考に沿って考えられる典拠は、基督降誕の場面であり、これを素材にしたアナトール・フランス「バルタザール」の最終場面である。あるいはこの作品を換骨奪胎した谷崎潤一郎「麒麟」の作品構図である。「この爛々たる狼星を見上げていると、突然、その星のすぐ下の所にすこぶる大きい赤黄色い星が現われた。オヤと思っているうちに、その見なれぬ巨きな星が赤く太い尾を引いて動いた。」「(李陵)一、二。狼星とは大犬座のシリウスの事でオリオン座の東隣に位置している。晩冬の夕暮れにシリウス(天狼星)の近くに現われた彗星、箒星に戦闘の前触れを李陵が、覚える場面である。島崎藤村「夜明け前」には、箒星の記述が二箇所見られる。「毎晩のやうに彗星が空にあらわれて怪しい光を放つのは、あれは何かの前兆を語るものであろう」(第一部第四章の四)、「箒星ですよ。千年に北の方へ出たのも、あの通りでしたよ。」(第一部第六章の二)。前者は、桜田門の変の前日の箒星の出

現に人々が不安な予兆を覚える印象的な一場面である。以上は諸般の事情から、すべて「李陵」執筆時の中島敦の脳裏にあった彗星に関する知識で、箒星出現が凶事に結びつく思考の現われである。

(註9)「陵、浚稽山に至って、単于と相い直う、騎、三万可なりなり。陵の軍を囲む。軍、両山(東西両浚稽山)の間に居る。大軍を以て營と為す。陵、士を引きて營の外に出で陣を為る。前行には戰盾を持たしめ、後行には弓弩を持たしむ。令して曰わく、『鼓聲を聞かば縦て金聲を聞かば止まれ』と。虜、漢軍の少なきを見、直に前んで營に赴く。陵、搏して戦い之れを攻め、千弩俱に発し弦に応じて倒る。虜、還走して山に上る。漢軍追撃し、数千人を殺す。」「(李陵伝)

(註10)「退く歩兵と追う騎兵。匈奴軍、遠巻きにして搏戦を避けるという作者の創作」(佐々木充「中島敦の文学」)、この辺の記述には戦後消滅した戦術に関する一般的な知識の反映がある。李陵は、浚稽山の山間地帯から受降城へではなく、居延塞を目指して後退する。

(註11)劣勢に陥った李陵軍と陣中に潜む女達の斬首で共に典拠に拠る。「陵、且つ戦い且つ引き、南行すること数日、山谷中に抵る。連りに戦い、士卒、矢に中って傷つく。三創の者は箒に載せ、両創の者は車を持かせ、一創の者は兵(武器)を持して戦わしむ。陵曰わく、『吾が志氣少しく衰う。鼓って起たざる者 何んぞ也。軍中豈に女子有る乎』と。始め軍の出でし時、関東の群盜の妻子にして刃に徙さるる者、軍に随がって卒の妻婦と為り、大いに車中に匿る。陵、搜して得、皆な劍もて之れを斬る。」「(李陵伝)

(註12)「明日復た戦い、斬首三千余級。兵を引きて東南し、故の竜城の道に循ごう。行くこと四五日、大沢の葭葦の中に抵る。虜、上風従り火を縦つ。陵も亦た軍中に令して火を縦ち以て自ずから救う。南行して山下に至る。単于、南山の上になり。其の子をして騎を將いて陵を撃たしむ。陵の軍、歩にて樹木の間に戦い、復た数千人を殺す。因りて連弩を發して単于を射る。単于下つて走る。」「(李陵伝)、典拠に拠りながらも創作時の作者の視覚的な鋭い感覚で再現された場面が、印象的である。火攻めに対して迎え火で応戦する戦略の初歩的な知識を確認し、「朔風は焰を煽り、真昼の空の下に白っぽく輝きを失った火は、すさまじい速さで漢軍に迫る。」「単于の白馬は前脚を高くあげて棒立ちとなり、青袍をまとった胡主はたちまち地上に投出された。親衛隊の二騎が馬から下りもせず、左右からさっと単于を掬

い上げると、全隊がたちまちこれを中に囲んですばやく退いて行った。」「(李陵一)、典拠に拠りながらも作者の視覚的、創造的筆致の卓越さを感じさせる。

「漢書」(「李陵伝」)に依拠しながらも、李陵に率いられた官軍と単于の統率下の匈奴軍の熾烈な激闘の場面を絵画的に記述する。両軍の死闘が、場所を変えて繰り返される状況を具体的に移動させて記す。「澗間の凹地」「平沙の中」「沼沢地」「沮洳地」「山麓の疎林」(「李陵一」という戦場の変遷を見せることで、両軍の戦いぶりを印象深く形象化している。「虜、上風従り火を縦つ。陵も亦た軍中に令して火を縦ちて自ずから救う。」という「漢書」の記録は「李陵」に生かされている。「漢書」のこの箇所は「古事記」篇者により日本武尊が焼津で火焔めに遭遇して危機を脱した挿話に生かされた可能性がある。この危機を共に脱した弟橘比売の歌が、「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」である。

(註13)「是の日捕え得たる虜言う、単于曰わく、『此れ漢の精兵なり。之れを撃ちて下すこと能わず、日夜吾れを引きて南のかた塞に近づかば、伏兵有ること母きを得ん乎』と。諸当戸(匈奴の官名)の君長皆な言う単于みずから数万騎を將いて漢の数千人を撃ち、滅すこと能わざれば、後以て復た辺臣を使うこと無けん。漢をして益々匈奴を軽んぜ令めん。復た山谷の間に力戦し、尚お四五十里して平地を得るも、破ること能わざれば廻ち還らん』と。是の時、陵の軍益々急なり。匈奴の騎多く、戦うこと一日に数十台。復た虜二千余人を殺傷せり。虜、利あらず、去らんと欲す。』(「李陵伝」)、この典拠「李陵伝」に沿う筆致を緩和せしめるかのように作者の作中感想が、二ヶ所付加される。「これを聞いて、校尉韓延年以下漢軍の幕僚たちの頭に、あるいは助かるかもしれぬぞという希望のようなものが微かに湧いた。」「たかが一兵卒の言った言葉ゆえ、それほど信頼できるとは思わなかったが、それでも幕僚一同些かホッとしたことは争えなかった。」「(「李陵一」)

(註14)「会々陵の軍侯管敢、校尉の辱しむる所と為り、亡げて匈奴に降る。具に言う、陵の軍、後救無く、射矢且に尽きんとす。ひとり將軍の麾下及び成安校、各々八百人前行と為り、黄と白とを以て幟と為す。当に精騎をして之れを射使めば、即わち破れんと。」「(「李陵伝」)

(註15)「単于、敢を得て大いに喜び、騎をして並んで漢軍を攻め使め、疾しく呼ばわって曰わく、『李陵・韓延

年、趣かに降り』と。遂くして道を遮り急に陵を攻む。陵は谷中に居り、虜は山上に在り。四面より射、矢は雨の下るが如し。漢軍南行し、未だ鞞汗山に至らずして、一日五十万矢皆な尽く。即わち車を棄てて去る。士尚お三千余人あり。徒だ車輻を斬りて之れを持ち、軍吏は尺刀(短刀)を持ちて、山に抵つて隘(狭)谷に入る。単于、其の後を遮り、(やまの)隅に乗って礮石を下す。士卒多く死し、行くを得ず。」「(「李陵伝」)

(註16)「昏れて後、陵、便衣(輕装)してひとり歩して營を出で、左右を止め、我れに随ごうこと母かれ、丈夫一単于を取らん耳と。良久しゅうして陵還り、大息して曰わく、『兵、敗る、死せん』と。軍吏或るいは曰わく、『將軍の威、匈奴に震うも、天命遂げず。後道を求めて徑に還帰せよ。泥野侯の如きも虜の得る所と為るも、後亡げて還り、天子、之れを客遇せり。況んや將軍に於いてを乎』と。陵曰わく『公止めよ。吾れ死せずんば、壯士に非ざるなり』と。是に於いて尽く旌旗及び珍宝を斬つて地中に埋む。陵、歎じて曰わく、『復た数十矢を得ば、以て脱るるに足れり。今兵(武器)の復た戦うもの無く、天明くれば坐ながらにして縛を受けん。各々鳥獸のごとく散らば、猶お脱れて帰り天子に報ずるを得る者あらん』と。軍士に令し人ごとに二升の糲、半の氷を持たしめ、遮虜の藪に至る者は相い待つことを期す。夜半時、鼓を撃ちて士を起こす。鼓鳴らず(大敗の徴)。』(「李陵伝」)

(註17)「陵、韓延年と俱に馬に上る。壮子従ごう者十余人。虜騎数千、之れを追う。韓延年戦死せり、陵曰わく、『面目の陛下に報ずるもの無し』と。遂く降る。』(「李陵伝」)

(註18)「軍人分散し、脱れて塞に至る者四百余人。陵の敗れし処は塞を去ること百余里なり。辺塞以聞す。(中略)後陵降ると聞き、上怒ること甚だし。陳歩楽に責め問う。歩楽自殺す。』(「李陵伝」)、中島敦が採らない一文は「上、陵の死戦せんことを欲し、陵の母及び婦を召し、相者をして之れを視使むるに、死喪の色無し。』(「李陵伝」)という箇所である。代わりに「武帝本紀」(「史記」)から武帝晩年の執務状況を記述した。李蔡、青翟、趙周の三人の丞相が殺害され、現在の宰相公孫賀が就任までを吉川幸次郎は、以下に記す。「公孫賀は、任命式の日、どうしても印綬をうけとろうとせず、頭を地にすりつけ、涙を流して、恩命を拝辞した。けっきよく武帝が、印綬をそこへおきざりにして、立ち去ってしまったので、しぶしぶ就任するほかはなかった」

(「漢の武帝」第四章の下)。公孫賀は、武帝の皇后の姉の婿である。皇后の叔父衛青と票騎將軍霍去病の没後、十一年間宰相の地位にあるも息子共に獄中死する。

(註19)「群臣皆な陵を罪す。」(「李陵伝」)「而して軀を全とうし妻子を保つる臣、随がって其の短を媒しつくる。」(「任少卿に報ずる書」)、後者は「自分らをあえて全 軀 保妻子の臣と呼んだこの男」(「李陵」二)という表現で採られた。「酷吏として聞こえた一廷尉が常に帝の顔色を窺い合法的に法を枉げて帝の意を迎えることに巧みであった。」(「李陵」二)は、「酷吏列伝」(「史記」)に拠る。

(註20)「上以て太史令司馬遷に問う。遷盛んに言えらく、陵は親に事えて孝、土に与りて信、常に落つて身を顧ず、以て国家の急に殉ぜんとすること、其の素より、蕃積する所なり。国土の風有り。(中略)彼の死せざるは、宜しく当(ちょうどよい機会)を得て以て漢に報ぜんとするなりと。」(「李陵伝」)に拠りながらも、李陵を罵る廷臣達に対する司馬遷の反感は、「任少卿に報ずる書」に発想を得ていると言う。

(註21)「初め上、武師を遣すに大軍もて出ださしめ、財に陵をして助の兵為ら令む。陵、單于と相い値うに及んで、武師功少し、上以えらく、遷、誣い罔き、武師を阻んで陵の為めに游説せんと欲すと。遷を腐刑に下す。」(「李陵伝」)、武帝の独自の判断を佞臣の助言に書き換えたのは、中島敦の日本人的な感性の故である。

(註22) 宮刑、宦官の中島敦による説明的な箇所であり、「黥、劓(はなきる)、剕(あしきる)、宮」(「李陵」二)の肉刑の内、前三者が武帝の祖父である文帝により廃止されていたという作者の支那通史に就いての濫筆が見られ、李陵を弁護する司馬遷の個性を語る箇所に自身の性格の反映もある。「頭脳明晰なことは確かとしてもその頭脳に自信をもちすぎた、人づき合いの悪い男、議論においてけっして他人に負けない男、たかだか強情我慢の偏癡人」(「李陵」二)。

(註23) 太史令司馬遷が、息子司馬遷の見聞を広めさせる為に海内を旅行させた事や、資料蒐集で人生が終わり「史記」執筆を息子に委ねた事など(司馬遷「太史公自序」)。

(註24)「春秋」「左伝」「国語」等の所謂編年体ではなくて、「史記」紀伝体の記述を模索する司馬遷の葛藤を述べた箇所、作者による「史記」の概論的な説明である。「彼も孔子に倣つて、述べて作らぬ方針をとった」(「李陵」二)、この一文の依拠する所は「述べて作らず、信じ

て古を好む。窃かに我を老彭に比す」(「論語」述而第七)である。これ等一連の記述の依拠する所は、佐々木充「中島敦の文学」に拠れば「所謂作るには非ず。而るに君之を春秋に比するは謬れり」(「史記」太史公自序第七)。「李陵」一篇でこの箇所、紀伝体を模索する司馬遷の姿が際立っているのは、実作者としての創作意識の反映だからだ。さらに「光と風と夢」(十六)で既に論述した文学論の一部である。「彼は『作ル』ことを極度に警戒した。自分の仕事は『述ベル』ことに尽きる。事実、彼は述べただけであった。しかしなんと生氣潑刺たる述べ方であったか? 異常な想像的視覚を有った者でなければとうてい不能な記述であった。」(「李陵」二)。これは「史記」(「項羽本紀」)での垓下で漢軍に包囲された項羽の胸中の独白の記述に仮託し、司馬遷に共通する自己の才能を中島敦が告白した箇所である。

(註25) 宮刑を受けて宦官と成った後の司馬遷の胸中は以下、司馬遷「任少卿に報ずる書」に依拠しながらの中島敦の心境的な感情移入の箇所である。「仮令え僕、法に伏し誅を受くとも、九牛の一毛を亡のうが若し。螻蟻と何を以て異らん。而して世は又た能く節に死する者に与かずとし、特り以為えらく、智窮まり罪極まって、自ずから免るること能わず、卒に死に就く耳と。何んとなれば、素より自ずから樹立する所の然ら使むるなり。人固より一死有り。或るいは太山より重く、或るいは鴻毛より軽きは、用の趨く所異ればなり。太も上は先を辱しめず。其の次は身を辱しめず。其の次は理色を辱しめず。其の次は辞と令を辱しめず。」(「任少卿に報ずる書」)

(註26)「はじめて、彼は、自分がこの一月狂乱にとり紛れて己が畢生の事業たる修史のことを忘れ果てていたこと、しかし、表面は忘れていたにもかかわらず、その仕事への無意識の関心が彼を自殺から阻む役目を隠々のうちにつとめていたことに気がついた。」(「李陵」二)この場面の依拠した箇所も司馬遷「任少卿に報ずる書」により、中島敦が一般的に敷衍化した場面である。「草創の未まだ就らざるに、会く此の禍に遭い、其の成らざるを惜しむ。已に極刑に就いて慍る色無し。僕、誠に以て此の書を著し、諸れを名山に蔵し、之れを其べき人に通邑大都に伝うれば、即わち僕、前辱の責を償のう。方たび戮を被ると雖も、豈に悔い有らん哉。」(「任人卿に報ずる書」)。

(註27) 宮刑後の司馬遷の苦悩の中島敦は、如何なく記述する。記述し表現する事にのみ生存の意義を見出した

男の苦痛を以下の如く描写する。「この屈辱の思いが萌してくると、たちまちカーッと、焼燙をあてられるような熱い疼くものが全身を駆けめぐる。彼は思わず飛上り、奇声を発し、呻きつつ四辺を歩きまわり、さてしばらくしてから歯をくいしばって己を落ちつけようと努めるのである。」(「李陵」二)。依拠した「任少卿に報ずる書」の該当箇所は以下の部分である。「百世を累ぬと雖も、垢弥々甚だしき耳。是を以て關は一日にして九たび廻り」最大限肉体的な苦痛の支那式表現「腸は一日にして九たび廻り」は、昭和天皇の終戦の詔勅「五内為に裂く」の典拠かも知れない。

(註28) 漠北の地で匈奴の虜囚となって後の李陵の生活。「李陵」(三)は、農耕民族たる漢帝国の武人が騎馬民族の地で生きる事の意味、両者の対比が鮮やかに記述されている。「一応は敵に従っておいてそのうちに機を見て脱走する一敗軍の賁を償うに足る手柄を土産として」(「李陵」三)は、辺境匈奴の地にあって祖国漢に対する愛着を抱きつつ騎馬民族に傷みを持って同化する一武人の物語である。依拠したのは佐々木充「中島敦の文学」に拠れば「陵の死せざるは為すあらんとするなり。故に前書の如く恩を国王に報いんと欲するのみ。誠にいらく、虚死するは節を立つるに如かず、名を滅するは徳に報ゆるに如かずと。」(「蘇武に答ふる書」)、「彼の死せざるは、宜しく当(ちょうどよい機会)を得て以て漢に報ぜんとするなりと」(「李陵伝」)。

(註29) この段落は、敵匈奴の単于の息子との友情の芽生えを記述する。(註28)と同じく農耕民族ではない騎馬民族である匈奴の生活観、人生観の違いを的確に記述している。武力に対する圧倒的な尊敬の念と弱者に対する侮蔑の念を隠さない。捕虜となった李陵に対する匈奴の厚遇を遺憾なく記述する作者の視線の背後には、外地生活で身に着けた中島敦の複合的な視線がある。「食を頒げる時も強壯者が美味をとり、老弱者に余り物を与えるのが匈奴のふうであった。」(「李陵」三)

(註30) 「上、因杆將軍公孫敖を遣し、兵を將いて深く匈奴に入りて陵を迎えしむ。敖の軍、功無くして還る。曰わく、『生口(捕虜)を捕得するに、李陵、単于に兵を為のうことを教え、以て漢軍に備うと言えり。故に臣、得る所無し』と。上聞き、是に於いて陵家を族す。母・弟・妻・子皆な誅に伏す。隴西の士大夫、李氏を以て愧となす。」(「李陵伝」)典拠では、漢軍に捕虜になった匈奴兵が自軍の強力なのは李陵の軍事指導によると発言したと公孫敖が上申している。中島敦は、匈奴の捕虜

と公孫敖の二人が李緒を李將軍と上申し、武帝が李將軍を李陵と認識したと記述する。

(註31) 典拠「李陵伝」では、匈奴に派遣された漢の使者と李陵との間のやり取りは、以下の如くである。「吾れ漢の為めに歩卒五千人を將い、匈奴に横行せるも、救ぎを以て敗る。何んぞ漢に負くとして吾が家を誅するや」「漢聞く、李少卿、匈奴に兵を為のうを教う」「廻わち李緒なり。我れに非ざるなり」と言った全うな会話である。「陵、其の家の李緒を以て誅せらるるを痛み、人をして緒を刺殺せしむ。」(「李陵伝」)、中島敦は平板な記録を劇的な構成に改変して文学的な効果を工夫している。「史記」(「李將軍列伝」)に拠り祖父李広、叔父李敢の運命を記す。

「大閼氏(匈奴の皇太后)、陵を殺さんと欲す。單于之れを北方に匿まう。大閼氏死す。廻わち還る。」(「李陵伝」)、中島敦は皇太后と李緒が関係があるからと事情を付け加えている。

(註32) 「陵を壯とし女を以て之れに妻す。立てて右校王と為し」(「李陵伝」)この一文は、生かされるも他は中島敦の個性的な創作である。「彼は陵を右校王に任じ、己が娘の一人をめあわせた。」(「李陵」三)。この箇所は中島敦の複眼的な思考が深く関与した段落になっている。李陵と司馬遷、行為によって苦悩を打破する者と、記録する事で現実を超克する者との対比で、二人の人物を形象化する。二人の人物の対比の延長で中華秩序に対して、根底的な批判が成される。意識は中華社会を引きずりながらも李陵の肉体は、辺境匈奴社会に同化して行く、肉体と精神の苦痛を伴って変貌する李陵の変身に作者の独創が光っている。この段の独自性は、「光と風と夢」で記述した事の反復である。しかし、作者の長期の南洋行の経験を経て、独自の鋭さが加味された。意識は、祖国漢にありながらも肉体は、匈奴の騎馬民族社会に同化して行く。これに与ったのは、行為の人である李陵の全人格である。武人ではなかった蘇武は、農耕民族である漢人の意識を最後まで払拭出来ずに最終的に祖国に帰還する。意識は、匈奴社会を拒絶しながら肉体が異国の風土に同化して行く過程を痛みを持って記述する。一人の武人の変貌を描く事を可能にしたのは、中島敦の複眼的な思考である。個人の意識内部の分裂を自覚していた彼は、「虎符」で象徴的に描いて見せた。朝鮮半島で共に濃厚な学生生活を共有した友人と偶然東京で再会した作者は、相手の存在を十二分に認識すること無く、学生時代同然

の言葉を交わして別れる。「光と風と夢」では、主人公は南洋サモアに生活しながら意識は、故郷エディンバラに拘束されている。時として意識混濁の時にややもすると理性は、覚醒してサモアの空気を呼吸しながらも肉体を伴った意識は、故郷の街を彷徨する。両作品は、主題としては実存的な傾向を持ち、これは作者の個性の属性である。「ここはアピアだぞ。エディンバラではないぞ」と言い聞かせながら作中人物は、意識下で生まれ故郷であるエディンバラの生家に向かって夜道を歩む。「虎狩」「光と風と夢」で扱われてきた肉体と意識の乖離、肉体は学習するも意識は途惑い低迷する現状を「李陵」で描いた。行為の人、武人である李陵は祖国漢と異国匈奴の狭間に引き裂かれる苦痛を行為に拠って解消する。結果として彼は、肉体に付随する意識にあっても匈奴社会に同化し、祖国漢をして第三者の視線で眺望して批判するようになる。「秋天一碧の下、唵々と蹄の音を響かせて草原となく丘陵となく狂気のように馬を駆けさせる。何十里かぶつとばした後、馬も人もようやく疲れてくると、高原の中の小川を求めてその渚に下り、馬に飲かう。」「諸夏の俗を正しきもの、胡俗を卑しきものと頭から決めてかかるのは、あまりにも漢人的な偏見ではないかと、しだいに李陵にはそんな気がしてくる。」（「李陵」三）。中島敦は、「北方行」で同時代日本の男達の運命を描くも時代に切迫しすぎて失敗し、再度「李陵」で同じ主題に挑んだ。中華秩序から離脱して生きる事の苦悩を中国漢代の男たちに仮託し、描き切った。私の学生時代は、ソ連赤軍の北海道侵攻が危惧された時期で陸上自衛隊は、当地で防備についていた。戦争の惨禍を受けてまでも守るべき祖国とは、何か。ソ連の傘下に組して人民日本として生存を保つ方が、日本人の幸福ではないかという疑問に、論客福田恒存は答えた。祖国防衛とは、日々の衣食住の数千年来の慣習を守る事であり、父祖伝来の地を離れた日本人に幸福は無いと言うものである。日露戦争時、日本は外国からの助言で樺太占領を成して結果的に南樺太占有を成した。カムチャッカ半島占領を成せば樺太全土の保有を成せたというのが、日露戦争後の日本人の反省である。十年後のソ連の労農政府転覆の為に日本は、連合軍の要請でシベリヤ出兵を為すが、むしろ樺太に白系ロシア人の為の露西亞帝国を建設し、流浪の数百万の人々の生活圏を確保すべきであった。祖国露西亞を離れた白系露西亞人の生活実態を知っている者は、私などが最後の世代

であろう。隣国支那の国共内戦では、カイロ会談で日本から奪回した台湾が、人民中国を逃れた数百万の人々の救済の地になった。サイゴン陥落による南ベトナム政府の消滅は、私の学生時代である。米軍の撤退と北ベトナムによる統一は、百万の難民を生む可能性があると危惧した米軍人妻の投書を読んだ記憶がある。結果は百万の難民発生は現実になり、米国に逃れた少数の幸運者を除いて、数十万の人々は海の藻屑になり歴史の闇に消えていった。

（註33）以下、（註33）～（註36）までの「李陵」蘇武の記述は、佐々木充「中島敦の文学」に拠れば「蘇武伝」に拠る。「敢へて武を求めず」（「蘇武伝」）が「もはや蘇武に会いたいとは思わなかった。」（「李陵」三）の一文に生かされた。漢の武帝の使者として匈奴に派遣された蘇武が、敵に捕獲されて幽囚の身になった事に就いて漢書（「蘇武伝」）に詳細な記録がある。「李陵」は、要約して蘇武の置かれた状況を簡潔に記す。「漢の信節を杖として羊を牧し、起き伏しにつけ心に堅持するところがあつたが、信節の旗飾りはみな落ちてしまった。」（筑摩文庫「漢書」第二十四）。蘇武は、北海（バイカル湖）の辺で漢の特使としての旗を堅持し、転向を潔しとしないで生存し続ける。さながら後年の残留諜報の為に離島に生き続ける皇軍兵士の先触れである。

（註34）「之れ久しく単于、陵をして海上に至りて武の為に置酒し衆を設けせしむ」「心を虚しうして相に侍せんことを欲す。」（大夫人（蘇武の母のこと）已不幸。陵、葬を送り陽陵に至る。子卿の婦（妻）、年若し。已に更嫁せしと聞く。」「子卿、老び陵の言を聴けよ。」（「蘇武伝」）、中島敦は李陵と蘇武の対面を劇的に再構成し、単于の命の通り二度に亘り投降を勧告し、実母の死と妻の再婚を告げる。「李陵」における蘇武に対する転向説得は、素材の「漢書」を逸脱して、作者に拠る劇的な再構成が成される。匈奴世界に同化し得る李陵の存在を熾烈に、無言で圧迫する蘇武の存在を際立たせている。依拠した「漢書」には、「人生朝露のごとし、何ぞ久しく自らを苦しめること此の如きや。」という李陵の発言を記録している。

（註35）この段は、李陵の存在を際立たせる為の典拠「蘇武伝」を離れた蘇武像が造型される。作者の胸中にあったのは、昭和十年代日本共産党の転向の問題であり、図らずも数年後の日本軍人の、あるいは日本国家の運命を暗示している。「漢書」には、李陵が二度に亘り蘇武の匈奴社会に帰順する旨、説得する記述がある。こ

れは後に漢帝国からの李陵奪回の為の使者の誘いを李陵自身が、再度拒絶する場面に変更されて使われている。匈奴の捕虜になった兩名、惨めな境遇である蘇武に対して李陵が劣等感を自覚する場面がある。同様の記録が、会田雄次「アロン収容所」（「中公新書」昭和三十七年十一月）にもあって中島敦「李陵」は、数年後の帝国日本の捕虜の境遇を予言的に記述している。

(註36) 匈奴に囚われた雲中地方の捕虜から武帝の崩御を知る。「蘇武伝」を変更して作者は「そのとき途中で雲中の北方を成る衛兵らに会い、彼らの口から、近ごろ漢の辺境では太守以下吏民が皆白服をつけていることを聞いた。」（「李陵」三）と鮮烈且つ構成上、絵画的眺望の記述にしている。中華思想から離脱しようとする李陵の反措定の蘇武像の形象化に成功している。獄中何十年の非転向共産党員が見せた転向組に対する優越を、作者はさり気なく書き加えている。

(註37) 「立政等陵を見るも未まだ私語するを得ず。即わち目くばせして陵を視る。而して数く自ずから其の刀環を循し、其の足を握って陰かに之れに論らせ。漢に還帰す可きを言う。」「吾れ已でに胡服せり」「請わくは少卿故郷に來帰せよ。富貴を憂うる母がれ。」「丈夫再び辱しむること能わず」（「李陵伝」）、典拠では任立政の二度の帰還懇願を一度は匈奴に馴染んだ事を理由に二度目は、自尊心を理由に拒否している。「その年の二月武帝が崩じて、僅か八歳の太子弗陵が位を嗣ぐや、遺詔によって侍中奉車都尉霍光が大司馬大將軍として政を輔けることになった。霍光はもと、李陵と親しかったし、左將軍となった上官桀もまた陵の故人であった。」（「李陵」三）。吉川幸次郎「漢の武帝」に抛れば、武帝は戻太子の事件五年後に崩御し遺詔を受けたのは、霍去病の弟である霍光と漢に捕虜になった匈奴の単于の子である金日磾の二人である。霍光は、昭帝を即位させその夭折後には、戻太子の孫である宣帝を即位させた。

(註38) 「陵、驚怯と雖も、もし漢、しばらく陵の罪を責し、其老母を全し、大辱の積志を奮うを得しめば」「此れ陵の宿昔、忘れざる所なり。陵家収族され、世に大戮と為る。稜、尚復た何を願はんや。やんぬるかな。子卿に吾心を知らしむのみ。」（「蘇武伝」）に記録された李陵の痛恨の恨みを抹殺し、「しかし、天はやつぱり見ていたのだという考えが李陵をいたく打った。」「いいたいことは山程あった。」「彼は一言もそれについてはいわなかった。」「（「李陵」三）に佐々木充は、中島敦の創作の意

義を見出している。

「万里を徑て砂漠を渡る／君が將となりて匈奴に奮ふ／路窮絶し矢刀摧け／士衆滅びて名己に墮る／老母己に死せり／恩に報ひんと欲すと雖も將た安くにか歸せん」（濱川勝彦通釈「万里の遠い路を通り砂漠をわたって、私は、天子の將軍として匈奴と奮戦した。しかし匈奴の大軍に包囲され路はたたれ、矢は尽き刀は砕け折れてしまった。部下は全滅し、私は捕われの身となって武人の名誉は地に落ちてしまった。年老いた母は（刑によって）既に死んでおり、恩を報じたいと思っても、どこへ帰ったらよいのか、どこにも帰るべき所はない」）。

(註39) 魯仲連、伍子胥、藺相如、太子丹、屈原の口を借りて語り続ける司馬遷の胸中を忖度した「史記」の概観である。「列伝第七十太史公自序の最後の筆を擱いたとき、司馬遷は凡に凭ったまま惘然とした。深い溜息が腹の底から出た。目は庭前の槐樹の茂みに向かってしばらくはいたが、実は何ものをも見ていなかった。うつろな耳で、それでも彼は庭のどこからか聞こえてくる一匹の蟬の声に耳をすましてるようにみえた。」（「李陵」三）は、「史記」完成後の司馬遷の肉体と精神の空虚を象徴的に記述して見せた。この印象的な一文を中島敦に記述させるに与ったのは、多分伊東静雄「庭の蟬」（詩集「春のいそぎ」）であろう。「旅からかへつてみると／この庭にはこの庭の蟬が鳴いている／おれはなにか詩のやうなもの／書きたく思ひ／紙をのべると／水のやうに平明な幾行もが出て來た／そして／おれは書かれたものをまへにして／不意にそれとはまるで異様な／一種前生のおもひと／かすかな聲ひをともなふ吐気とで／蟬を聞いていた」、職業作家として「李陵」終結部執筆に意を注ぐ中島敦に刊行されたばかりの「春のいそぎ」（「弘文堂」昭和十七年九月）が、座右にあったと思う。

(註40) 「陵、匈奴に在ること二十余年。元平元年病死せり」（「李陵伝」）。「漢書」（「匈奴伝」）。

(註41) 「彼は同義的批判の基準を示すものとしては春秋を推したが、事実を伝える史書としてはなんとしてもあきたらなかった。もっと事実が欲しい。教訓よりも事実が、左伝や國語になると、なるほど事実はある。左伝の叙事の巧妙さに至っては感嘆のほかはない。しかし、その事実を作り上げる一人一人の人についての探求がない。」「彼も孔子に倣って、述べて作らぬ方針をとったが、しかし、孔子のそれとはたぶんに内容を

異にした述而不作である」彼は『作ル』ことを極度に警戒した。自分の仕事は『述ベル』ことに尽きる。事実、彼は述べただけであった。しかしなんと生氣^{はいつつ}激刺たる述べ方であったか？異常な想像的視覚を有った者でなければとうてい不能な記述であった。」「(「李陵」二)、これは司馬遷の「史記」執筆の態度に仮託された作者自身の創作態度である。R. Stevensonの伝記小説「光と風と夢」では、作品後半部では中島敦自身が頻りに顔を出して自身の創作手法、執筆態度を披露する場面がある。「スタイルばかりで内容の無い駄作を書きまくり」「思想がうすっぺらだの、哲学がないのと、言い度い奴は勝手に言ふがいい。要するに、文学は技術だ。」(九四年十一月×日)、自己の創作行為に就いての沈潜、高揚の記述は、中島敦自身のものであろう。こうして作家的完成への述懐から、芥川龍之介流の感想が続く。「あのワイマールの宰相のことをひよいと思ふ。あの男は少くともスウブのだしがらではない。いや、逆に、作品が彼のだしがらなのだ。ああ！俺の場合は、文学者としての名声が、不当にも、俺の人的な完成(もしくは未熟)を超越し過ぎたのだ。」という述懐が続く。これは先に披露された文藝理論の続きである。「性格乃至心理的小説と誇称する作品がある。何とうるさいことだ、と私は思う。性格や心理は、表面に現れた行動によってのみ描くべきではないか？」「『筋の無い小説』という不思議なものに就いて考えて見たが、よく解らぬ。」(五月×日)、この箇所は中島敦が、芥川龍之介の文藝理論をR. Stevensonに仮託してなぞっている箇所である。

(註42) 黒木三造「いつのころからか、彼は、自分と現実との間に薄い膜が張られているのを見出すやうになった。」折毛伝吉「太陽も冷えて消えて了つて、真暗な空間をただぐるぐると誰にも見られずに、黒い冷たい星共が廻っているだけになつて了ふ。」二人は「かめれおん日記」「狼疾記」から逆照射すれば互いに作者の分身である。英国軍人トムソン少佐は行為に心の残影を残さない、典型的な武人である。「北方行」で登場の三人は、「光と風と夢」で思索と行動の作家、統一的人格として再登場し、「李陵」では記述の人司馬遷、信念の人蘇武、行為の人である李陵の認識の世界で把握されている。「北方行」の未完の人物像は、後年の中島敦作品にその残像を揺曳している。折毛伝吉の意識の攪乱場面、「(あとから考えると全く不思議なことに、その時夢の中で自分は上海(彼がそこで三年の月日をす

ごした)の土の上にいるのだというような意識を、感じて(持って)いたものらしい。』『ここは北平だぞ、上海ではないぞ』という考であった。」「(「北方行」第三篇三)は、後にR. Stevensonの南洋サモア島での意識混濁の場面に借用されている。「私は、地面に倒れていた間中、ずっと、自分がエディンバラの街にいるものと感じていたらしいのだ—『ここはアビアだぞ。エディンバラではないぞ』という考であった。」「(「光と風と夢」七月×日)、両方の作品には、引用文の後に見知らぬ老人と会話をする同一の挿話が記述されている。これは、当期中島敦が愛読したカフカ作品の援用のような気がする。

(註43) 芥川龍之介「支那遊記」は、北伐直前の支那遊覧の貴重な記録である。中島敦「北方行」の下地になった作者の南満州旅行は、それより十年後で国民党による北方軍閥征討のただ中である。中島敦と横浜高女で同僚であった岩田一男は、中島敦が芥川龍之介全集を売却して奈良、京都に旅行した旨記録している。しかし、芥川龍之介文学否定の見解に対しては、中島敦は同調しなかった。「北方行」は、芥川龍之介「支那遊記」を視野に入れている事は確実である。

(註44) 中島敦「北方行」の裏面には、芥川龍之介「支那遊記」の世界が横たわっている。「過去帳」(「カメレオン日記」「狼疾記」)二篇で自身の自意識の問題を扱った中島敦は、自意識打破の為の行動主義文学の一環として「北方行」創作に取り組んだ。直面した課題は、当時一世を風靡していた戦争文学との一線を画する事であった。彼の自意識の問題は、昭和十年代を覆った不安文学、シュスト「悲劇の哲学」の影響に拠る。「過去帳」から「北方行」への主題の変遷は、これも当時の時代風潮であった「思索から行動へ」「自意識から行動へ」を中島敦流に実践したものである。前期の二つの標語は、独逸思潮から来ている。取分けニーチェの箴言「思い起こせばまず身を起こせ」に拠る。

個人での意思決定が不安を呼び込み、個としての存在が私的な不安を惹き起こすという前提がある。独逸の民族主義運動が、当時の日本に影響を与えたのは、共産党壊滅以後である。共産党の規律に従う、書記長の意向に沿う思索と行動を取る事で個人としての不安から解放される。昭和八年佐野学、鍋山貞樹二人の獄中での転向声明以後、共産党の規律に変わり独逸思潮の行動主義が風靡し、戦争文学が隆盛を極める。中島敦「わが西遊記」(「悟浄歎異」「悟浄出世」)は、本人が

言うように「ファウスト」「ツァラトゥストラ」の日本版であり、中島敦流の行動主義文学である。中島敦「わが西遊記」が、行動主義文学である事の証明は、著者没後に田中英光「我が西遊記(上、下)」(「桜井書店」昭和十九年六月、十月)を生んだ事でも分かる。

(註45)「漢書」の翻訳(筑摩文庫「漢書」)に拠れば、『臣節を屈し使命を辱めるならば、生きていても、何の面目あって漢に帰れよう』と言って、佩刀を引きよせてみずから刺した。衛律は驚いて、みずから武を抱きかかえ、人を走らせて医者呼んだ。地面に穴を掘って中に埋火を置き、武の体をその上に覆いかぶせ、武の背中を滔いて血を出した。武は気絶していたが、半日で息を吹きかえた。』(「漢書」第二十四)。蘇武が、匈奴に囚われた状況を中島敦は、省略している。「元来蘇武は平和の使節として捕虜交換のために遣わされたのである。ところが、その副使某がたまたま匈奴の内紛に関係したために、使節団全員が囚えられることになってしまった。」(「李陵」三)という簡単な記述である。「漢書」に拠れば、蘇武は武帝命令で捕虜交換の勅命で匈奴に派遣された。副使は張勝であり、常恵が同伴した。「副使某」(「李陵」三)とは張勝のことであるが、彼が匈奴に囚われていた虞常と密談し、且鞮侯单于の母である閼氏を強奪して漢に帰還する秘密謀議を凝らすも且鞮侯单于の息子、左賢王等によって鎮圧される。且鞮侯单于是、一連の事件の始末を衛律に一任した。実母強奪事件の顛末を中島敦は、李陵が且鞮侯单于の首を土産に漢に帰還する計画の場面に転用している。「隙があったら单于の首でも、と李陵は狙っていたが、容易に機会が来ない。」(「李陵」三)という場面である。

(註46)「武を大窖の中に幽閉し、一切飲食させなかった。天空から雪が降ると、武は伏して雪をくらい、毛織衣の毛を雪といっしょに呑みこみ、幾日も死ななかつたので、匈奴では神妙不思議に思った。そこで武を北海のほとり無人のところへ移して、雄牛を牧羊させ、もし雄羊が子を産むことあれば、帰ることができるはずであった。その属官常恵らを分け離し、それぞれ別の場所に配置した。」(「漢書」第二十四)、ここに登場する蘇武の部下常恵は、蘇武救出の重要な役目を担う。「十九年前蘇武に従って胡地に来た常恵という者が漢使に遭って蘇武の生存を知らせ、この嘘をもって武を救出すように教えたのであった。」(「李陵」三)

(註47)漠北辺境の地名に就いては、村田秀明「中島敦『李

陵』の創造」(第四章)に詳細な研究がある。中島敦所有の地図帳(最近世界地図)には、北海(バイカル湖)に注ぐ三種の河川の名が記述されている。「(「鄧居水」「姑且水」「余吾水」)これら三つの河川に関する調査報告が成されている。「匈奴の主力は現在、陵の軍の止营地から北方鄧居水までの間あたりに屯していなければならない勘定になる。」(「李陵」一)「姑且水を北に溯り鄧居水との合流点からさらに西北に森林地帯を突切る。」(「李陵」三)、二か所に登場する「鄧居水」(セレンガ河)である。「姑且水」に就いては、「鄧居水」(セレンガ河)の支流にあたる河川であり、「トラ河」である。「单于是この報に接するや、ただちに婦女、老幼、畜群、資材の類をことごとく余吾水(ケルレン河)北方の地に移し」(「李陵」三)とある。三河川を「李陵」創作に取り入れるのに依拠した資料に関しては、前掲村田秀明に探査報告がある。

(註48)強固な生活基盤である中華社会から逸脱した李陵は、自己の精神を肉体を全身で受け止めてくれる社会背景を喪失している。彼の苦悩の源泉は、全身全盤で生存し、帰属してきた組織基盤を喪失した事である。会田雄次「アーロン収容所」には、戦時下個人的に投降した者と敗戦後天皇の命令で集団で投降した者との間に和解し得ぬ溝があったと記述される。転向した李陵に対する非転向者である蘇武の憐愍の情、中島敦「李陵」のこの箇所の記事事項の背景には、昭和十年代の共産党離脱者の問題が横たわっている。共産党の転向者、非転向者もその多くは、戦後新生日本共産党により除名処分を受けて党籍を失っているが、彼らの集会は各自の主観的な序列が複雑で周囲の者の気の使い方が大変な旨、週刊誌報道で読んだ記憶がある。これは、日本共産党の特殊集団での非普遍的な事例であるが、学閥集団内部にも同趣旨の序列があるらしい。文壇を滅亡させる事に預かった業績を持つ松本清張は比較的に政治的な立場を同じくする進歩的な文化人、大岡昇平、大江健三郎、埴谷雄高等の定例食事会の分裂を揶揄して、彼等の話を仄聞すると地球が狭く感じられると述懐している。大岡昇平と行動を共にした成城組の大江健三郎は、天皇廃止論者である。行動を共にする大岡昇平は、レイテ島での皇軍兵士としての捕虜体験を恥じて、天皇からの祝賀の挨拶を受ける事を避ける為に芸術院会員に成る事を辞退した。終始行動を共にする成城組と云えども、個人の主義主張は異なる訣で松本清張が考える程に一枚岩ではない。

(註49) 漢帝国は、既にこの時期に稲作定住生活を営んでいたであろう。これに反して騎馬民族は、広大な土地を移動していた。双方の民族を歴然と区別する要素は今日でも基本的に同一である。第一に食生活の異質な事、第二に実践能力重視、第三に人間能力を瞬時に評価する事である。二十世紀現在の東北地方、満州を日本が占有し、そこに留まる限り国民党の蒋介石は異議を唱えなかった。北伐完了後の国民党が、日本に敵対したのは日本陸軍が万里の長城を超えて支那大陸に越境してからである。蒋介石は、毎日の食生活で満州に対して異国の認識があったからであろう。「二人は縦横に曠野を疾駆しては狐や狼や羚羊や鴨や雉子など射た。」「今日の獲物を羹の中にぶちこんでフウフウ吹きながら啜る」(「李陵」三)という記述に騎馬民族の食生活の反映がある。第二の条件は、「まだ李陵ほどの手強い敵に遭ったことはない」と正直に語り、陵の祖父李広の名を引合いに出して陵の善戦を讃めた。虎を格殺したり岩に矢を立てたりした飛將軍李広の驍名は今もなお胡地にまで語り伝えられている。陵が厚遇を受けるのは、彼が強き者の子孫でありまた彼自身も強かったからである。」(「李陵」三)という記述に匈奴社会の弱肉強食の世界が如実に表現されている。極端な男尊女卑の世界は、同時に文化保持能力に欠けている。漢帝国を死に瀕する程に弱体化させた騎馬集団、匈奴の事跡は完全に消滅して漢民族の記録に片鱗を窺うのみである。「生みの母に対する尊敬だけは極端に男尊女卑の彼らでも有っているのである」(「李陵」三)という一文は、騎馬民族に就いての作者の認識を見せている。降服した敵将に対する好意を且鞮侯单于是、如何なく示し、その息子左賢王つまり後の孤鹿姑单于是厚い友情を見せる。歴史的な鳥瞰では、農耕民族たる帝国日本は騎馬民族米国の軍事力に屈服した。戦後の日米同盟は、戦勝国たる米国の帝国日本の畜闘に対する敬意の表れである。大東亜戦争の苦闘の記憶が消滅し、日米同盟が零弱に成った時に危機がある。第三の匈奴社会の特徴も第二の特質の属性であるが、能力判定の時間が掛からない。人材登用に民族、人種さらには過去の敵対者たる事を考慮しない、柔軟性である。

且鞮侯单于が、李陵に軍略の相談をする場面がある。匈奴の君主は、敵将でありながら相手の民族、過去の敵対行為に拘りを見せない。「それは東胡に対しての戦いだったので、陵は快く己が意見を述べた。次に

单于が同じような相談を持ちかけたとき、それは漢軍に対する策戦についてであった。李陵はハッキリと嫌な表情をしたまま口を開こうとしなかった。」(「李陵」三)、こうした李陵も漢に慰留した妻子の誅殺後は、匈奴軍の一員として戦場に出る事になる。且鞮侯单于の娘を娶り、匈奴軍右校王となって従軍するも古戦場である浚稽山の麓を通過した時には、漢軍将官の意識が戻り行軍を見合わせる。「曾てこの地で已に従って死戦した部下どものことを考え、彼らの骨が埋められ彼らの血の染み込んだその砂の上を歩きながら、今の己が身の上を思うと、彼はもはや南行して漢兵と闘う勇気を失った。」(「李陵」三)、肉体は意識は匈奴の将官となっても李陵の本能は、彼を生み育てた漢帝国の属性を喪失していないのである。大東亜戦争で敵地に取り残され、祖国帰還が叶わず現地在住で人生を終結させた皇軍兵士の運命を暗示している。

戦後祖国帰還の機会に恵まれながらも、再度日本人になる事を放棄した無数の皇軍兵士の先触れであり、「丈夫再び辱めらるるあたわずと答へた」(「李陵」三)である。

(註50) 「後五年、昭帝の始元六年の夏、このまま人に知られず北方に窮死すると思われた蘇武が偶然にも漢に帰れることになった。漢の天使が上林苑中で得た雁の足に蘇武の帛書がついていた云々というあの有名な話は、もちろん、蘇武の死を主張する单于を説破するためのたためである。」(「李陵」三)、ここに至る十九年の年月を「漢書」は、具に記録している。「武はすでに北海のほとりに行つたが、扶持米の来るわけがなく、地を掘って野鼠を捕ったり、草の実をたくわえて食べた。漢の信節を杖として羊を牧し、起き伏しにつけ心に堅持するところがつたが、信節の旗飾りはみな落ちてしまった。」(「漢書」第二十四)、この場面は天皇の終戦の詔勅を知らずに異国に取り残された皇軍兵士の運命に重なる記述である。蘇武の兄弟に就いて中島敦は、「彼の兄は天子の行列にさいしてちょっとした交通事故を起こしたために、また、彼の弟はある犯罪者を捕えなかったことのために、ともに責を負うて自殺させられている。」(「李陵」三)の記述の依拠した箇所は、「蘇建は杜陵の人である。……三人の子があり、嘉は奉車都尉となり、賢は骑都尉となり、次子の武がもつとも名を知られた。」(「漢書」第二十四)であるが、中島敦は任意に変更している。

(註51) 公孫敖の武帝への遠征敗北の報告は、「敖の軍、功

無くして還る。曰わく、生口(捕虜)を捕得するに、李陵、單于に兵を為のうことを教え、以て漢軍に備ふ」(「李陵伝」)、これに拠れば武帝の李陵家族誅殺は、やむ得ぬ仕打ちである。公孫敖は捕獲した匈奴の捕虜を取り調べた結果、匈奴軍の軍事指導を李陵が成した確証を得ての皇帝への意見具申、報告であった訣だ。あるいは戦場の混乱、言語の不自由から捕虜が、李緒を李陵と言ったか、公孫敖が李緒を李陵と取り違えたか。結果的に武帝は、李陵の漢帝国への裏切りと認識して一族抹殺の勅命を発した。中島敦は、公孫敖が敗北の原因を漢の降将李將軍の軍事指導であるとした発言を武帝が、李將軍を李陵と断定したと記述する。

こうして武人たる李陵の漢帝国の一族に対する仕打ちに対する回顧、漢帝国離脱の行動に連なるのである。武帝の代になり漢帝国が、武の時代から文官の時代に移行していた事もある。祖父李広が、武勲の割に高位を望み得なかった事の原因である。祖父李広、叔父李敢を憤死させた衛青、霍去病は叔父、甥の関係で二人とも武人であることは李広、李敢と同じである。しかし、衛青の姉は武帝の寵愛を受けていて立場が違う。これに就いては、文帝は李広に就いて「惜しいことに広としては良い時勢に生れ合わせなかった。もしも高祖の世にいたならば、万户侯などわけもなく得られたろうに」(「漢書」第二十四)と発言している。

(註52) 武人ではない蘇武は、匈奴に囚われた後も騎馬民族社会に同化する意思を持たず能力もなかった。漢帝国が、自分の存在を忘却の果てに追いやっても意に介さない。武帝が授けた特使としての象徴「節旄」を抱いて匈奴の地に朽ちる覚悟である。こうした蘇武の生き方を目撃した李陵は、啞然とせざるを得ない。その立場は武官と文官の違いに依るが、漢帝国の誹謗、中傷の類が彼蘇武には、実害を与えなかったと言える。武帝崩御を聞いた蘇武は、「南に向って慟哭し、血を吐き、朝な夕な哭いた。」(「漢書」第二十四)とある。この場面は、「蘇武は南に向かって号哭した。慟哭数日、ついに血を嘔くに至った。その有様を見ながら、李陵はしだいに暗く沈んだ気持ちになっていった。」(「李陵」三)というのが中島敦の記述である。この辺にも「李陵」が、匈奴社会に同化した李陵を主人公にしたものである事が分かる。「李陵」は、著者没後に深田久弥による命名であるが、「漢北悲歌」の物語は、李陵を主役に配した作品である事を納得させられる。

(註53) 匈奴社会は典型的な騎馬民族で、賞罰は厳格で同

時に功績は顕著に表れる特徴がある。農耕民族たる漢帝国は、佞臣が蔓延する嫉妬社会である。蘇武の慟哭を目撃して、悲嘆に暮れるものの冷静な視線で黙認する李陵を作者は、以下の如くに記述する。「李陵は己と友とを隔てる根本的なものにぶつかっていやでも己自身に対する暗い懐疑に追いやられざるをえない」(「李陵」三)、ここには中島敦の資料「漢書」読み込み不足がある。文化使節代表たる蘇武と武人たる李陵の相違に対して目配りが成されていない。実力を伴う民間会社と年功序列と学歴で評価する公務員社会の構成員とでは、現在でも身の処し方は随分異なる。

(註54) 「酷吏として聞こえた一廷尉」とは、「李陵」典拠の一つである「漢書」(第三十)に拠れば、杜周のことであり、発言内容は以下の如くである。「三尺の法律は、いったいどこから出た者であろう。前の君主が是としたことを表わして律とし、後の君主が是とすることを列ねて令としたもの、いわば時宜にかなうものを是とするのであり、どうして古法にのっとることがあろう」(「漢書」第三十)。

(註55) 中島敦「李陵」で描かれたのは、紀元前数百年以前の漢帝国内部の命令と服従の物語である。登場人物は、武帝を頂点に戴く漢朝廷であり、敵匈奴の手中に落ちた李陵、そして蘇武の二人である。さらに漢帝国にあって惨禍を被る司馬遷でもある。漢の武帝は、恐らくは百年以前に中華帝国の秩序を最初に作った秦の始皇帝の再臨なのであろう。中華秩序の頂点に立つ皇帝権限は、泰山での秘密儀式で齎されたもので、皇帝個人の出自は問題にしない。皇帝権威が崩壊した時には、支那は無秩序の混沌の社会と化す。中華社会に生きる者は、誰でもこの歴史的な事実を熟知したので蘇武は、あるいは李陵は、いかなる命令に対しても反抗の姿勢を見せない。李陵が、最終的に漢帝国内部の秩序に復帰する事無く、辺境騎馬民族社会に同化したのは、彼が軍人であったからである。武帝の理不尽な命令で宮刑の処罰を受けた後、司馬遷は作品中で述懐してする。「なんといっても武帝は大君主である、そのあらゆる欠点にもかかわらず、此の君がある限り、漢の天下は微動だもしない。高祖はしばらく措くとするも、仁君文帝も名君景帝も、この君に比べれば、やはり小さい。ただ大きいものは、その欠点まで大きく写ってくるのは、これはやむを得ない。」(「李陵」二)

数千年以前に漢帝国の宮殿で繰り広げられた佞人達による朝廷劇は、その配役から物語展開とその結末

に至るまで中国共産党の内部抗争に重なる。孔子と孟子が、支那の軍勢を統率して、日本に攻め込んで来たら如何するか。両將軍を切り殺す事が、孔孟の道であると言うのが、江戸三百年間の日本人の思考であった。近代百年は、江戸時代の人々の持っていたある種の現実感覚を喪失した歴史過程であった。日露戦役以前の指導者が、朝鮮、支那の現実を見誤らなかつたのは、彼等が漢籍に拠る知識と現実の近隣諸国に対する認識を混同しなかつた為である。福沢諭吉「脱亜入欧」の苦渋の選択が、巷間に流布していた成果かも知れない。孔孟の道、そんな物は支那で実現した事はなく、今後も実現の可能性はない。数千年を閲して、支那大陸で書物の世界でのみ取り沙汰された綺麗ごとであると言うのが、黄文雄の一連の著作の結論である。日露戦役以後の日本は、亜細亞で唯一達成した法治国家たる自国の等身大で支那、露西亞を眺望して、契約の履行出来ない人知国家の実態を認識したと言える。戦前の事例では、共産主義国家ソ連の実態の認識不足から、樺太国境を越えた岡田嘉子と杉本良吉の場合がある。さらにナチス独逸の宣伝に感わされた高名な独逸文学者、実吉捷郎の例もある。T. マンの紹介者として名を馳せるも、彼の米国亡命の選択に対して、怒りを露わにした。戦後になって実吉捷郎は、自身の戦時下の身の処し方を多に反省しているが一。今日の視点で眺望すれば、絶対主義国家は、内部の荒廃を隠蔽する為、宣伝作戦に秀でていたと言える。さらに外国の惨憺たる生活実態は、日本国内に知られない側面がある。「妙なもので、君たち『洋行者』は、君たちの外國に於けるみじめさを、隠したがる。いや、隠しているのではなく、それに気づかないのか、もし、そんなだったら話にならぬ。」（「如是我聞」二）と云うのは太宰治の発言である。最近では、作家の曾野綾子は、カトリックの世界的規模の組織の助力で亜細亞、アフリカ諸国の報告を成すも全ては、一旅行者の視点で定住者の生活感覚ではない。アフリカの難民キャンプに生涯の定住を命じられたら、行動派作家も音を上げるだろう。「田舎者の出世の早道は、上京にある。しかも、その田舎者は、いい加減なところで必ず歸郷するのである。そこが秘訣だ。」と云うのが、前記太宰治の発言の続きである。私の学生時代は、支那での文化大革命の最中であり、隆盛を極めた学生運動の動きと相まって、大新聞の文革礼賛は頂点に達していた。支那大陸での憲兵の経歴を有する高校時代の教員は、支那大陸での生活向

上の報道を一蹴した。さらにソ連抑留十年の経歴を有する商店主は、文化大革命の初期の段階で権力闘争であると断言していた。共産党員同志の殺しあいに、慣れ合いとか、情状酌量は無く、相手が死ぬまで闘争は終結しないというのが彼の発言である。他人の事は言えない、以下は私自身の経験である。田舎の高校生であった私は、一日上京して朝鮮大学での金日成思想の講習を受けた経験がある。不良少年、不良少女の駆け落ちの下見の為の上京に、隠蔽工作の一員として何も知らない私が、同伴させられた訣である。生まれて初めて上京した高校一年生であった私に朝鮮大学の一学生が、密着して思想教育をしてくれた。チエ、チエ思想を学び、これに共鳴すれば日本人である君も平壤大学への留学が可能である。平壤大学在籍のままソ連の民族友好大学留学も可能性があるという助言であった。田舎の高校一年生であった私は、外国語大学に入学し、平壤大学から民族友好大学に学ぶ自分の将来を夢想した。私に思想教育を施した在日朝鮮人であった彼は、朝鮮大学在籍のまま平壤大学に留学し、ソ連の民族友好大学にその後学んだろうか。話が、横道に逸れたので再度紀元前の漢帝国の宮廷に戻そう。

漢帝国の宮廷の密室劇が、そのまま時代を閲して、今日の人民共和国の政治体制と密着している事に言及したい。民族の深層心理に刻まれた記憶の問題でもある。個人でも国家でも出発時の形態は、その後も持続し続ける事、個人も国家も時間と歴史を閲しても、その形態に極端な変貌は見られない。個人的に私は、司馬遼太郎と松本清張を愛読し続けて来たが、二人の没後の印象は随分異なる。自唐史観を打ち破った事で前者の功績は偉大であるが、松本清張の業績に対する程に研究意欲を抱かせない。芳賀徹「司馬さんへの小さな挑戦」（「文藝春秋」平成十八年二月）には、司馬遼太郎「冷泉斬り」「大楽源太郎の生死」により、幕末の復古大和絵の画家である冷泉為恭ひいでたぬりかの事績を知り、脱帽した旨記述がある。しかし、松本清張の遺稿「神々の乱心」での天皇家に対する野心的な挑戦に比較すると前者は、百科全書的な啓蒙的な著述である。後者の古代史と現代史に対する挑戦に私個人は、研究的な意欲を覚えている。二人の経歴の何が、この種の相違を齎したか。この答えは、直木賞と芥川賞の相違、直木三十五と芥川龍之介の文学の質に由来しているように思う。明治の頃より日本人は、英国、仏蘭西産の推理小説を愛読し、個人財産を守る国、契約が履行される国と人知

の国、支那や露西亜の国情の相違を大衆路線で認識していたはずであるが、日ソ不可侵条約の履行を国策実行者が信じたのは不思議である。

元寇の侵略を受けた壹岐、対馬の惨状の民族的な記憶は雲散霧消した結果、宗主国である元の民族的な行動を学習したソ連の実態を見誤った。終戦直後のソ連占領地区の惨状は、さながら元寇の直撃を受けた壹岐、対馬と同一である。

今私は、紀元前数百年の漢帝国の宮廷での密室劇が、即私自身の学生時代十年間の人民中国の文化大革命の構図に重なる事に言及したい。漢帝国以前に最初に統一支那を建設した始皇帝は、側近宦官を寵愛しその暗躍で帝国は滅亡した。高祖も晩年は、側近韓信を疑心暗鬼で抹殺し、漢帝国の弱体を招来した。芥川龍之介「支那遊記」には、西湖畔の秋瑾の墓石での感慨が記されている。満州族の消を苦闘の果てに打倒した後も支那の混乱は、收拾がつかない。芥川龍之介に三人の支那の知識人は、交々同一の事を語っている。「現代の支那は遺憾ながら、政治的には墮落している。不正が公行している事も、或は清朝の末年よりも、一層夥しいと云へるかも知れない。」「支那は共和しやうわする限り、永久に混乱こんらんは免れ得ない。」「共和しやうわにあらず復辟ふくへきにあらず。這般しやうはんの政治革命が、支那の改造に無力なるは、過去既に之を証し、現在亦之を証す。然らば吾人の努力すべきは、社会革命の一途あるのもと。」、芥川龍之介が記録に残したこれ等の発言は、順に章炳麟、鄭孝胥、李人傑のものである。最終的に支那は、清朝打倒の後数十年を闊して人民中国として統一され、李人傑の予言が報われた。清朝打倒の後に北伐で全支那を統一した国民党は、支那の国情にそぐわない民主主義政治形態であった故に、より皇帝政治に近い共産主義に取って代わられたと言えそうである。人民中国の皇帝に成った毛沢東に仕える周恩来は、さながら漢帝国の皇帝武帝に忠勤を励み、最後に獄死した丞相公孫賀を思わせる。文化大革命の最中、孫文夫人である宋慶齡は、単身宗家の三姉妹が少女時代を過した上海の接収された自宅を訪ねる。彼女の独白は、一つの王朝を打倒し別の政治形態に移行させる事は、容易ではなかったと云う物である。

(註56) 司馬遷しはせんが、宮刑きやうけいを受けた漢帝国の武帝時代の宰相は、公孫賀こうそんがであった。宰相と皇帝との関係に就いて中島敦は、簡潔に以下の如くに記述している。「李蔡・翟翟・趙周と、丞相たる者は相ついで死罪に行な

われた。現在の丞相たる公孫賀こうそんがの如き、命を拝したときに己おのが運命を恐れて帝の前で手離して泣出したほどである。」「神仙しんせんの説を好み方士巫覡ほうしふげきの類を信じた彼は、それまでに、己おのの絶対に尊信する方士どもに幾度か欺かれていた。漢の勢威の絶頂にあたって五十余年の間君臨したこの大皇帝は、その中年以後ずっと、靈魂の世界への不安な関心に執拗しつようにつきまわっていた。」「(李陵)二)、中島敦流の要約に拠る皇帝と宰相の関係は、以上のようなものである。吉川幸次郎「漢の武帝」に拠れば、前任者である三人の宰相が疑心暗鬼になった武帝により自殺させられている。自己の運命を予見して公孫賀は、宰相任命を辞退するも武帝は、宰相の印綬を彼の面前に置き去りにして辞去、仕方なく彼は宰相に就任したとある。公孫賀は、武帝寵愛の衛夫人の姉の夫であり、武帝は義理の弟になる訣である。しかし、彼の心配は事実となって悲劇的な結末を迎える。武帝皇后の甥である事から、傍若無人の振舞いのあった息子の罪の連座で宰相は、十一年後に獄死する。吉川幸次郎は、「漢の武帝」で一章を設けて神仙に没頭し、政治を疎かにした晩年の姿を記述している。秦の始皇帝、そして調停能力で実力者項羽を敗死させて、中原に覇を唱えた高祖と同じ道を歩んだ訣である。

中島敦「李陵」での漢帝国の宮廷劇、李陵を処罰し、擁護する司馬遷を罪科に落とす皇帝政治が最近の中国共産党の権力闘争、文化大革命と類似している事に驚く。民族の記憶、政治形態、行動様式に変化は無い、数千年を闊しても何ら変わらないという感想を持つ。独立を武力で達成した米国は、現在も国家意思としての力の行使を躊躇わぬ。秦の始皇帝により統一国家建設を成した支那は、現在も始皇帝の皇帝権力の支配下に拠ってのみ統治され得る国家である。清朝崩壊後に中華民国が成立するも、実際は軍閥の乱立する無法国家に成ったに過ぎない。武力で、北伐で、全支那を統一した国民革命軍の蒋介石も国民政府首席を三度降りて下野している。対して毛沢東の方は、共産党主席の座を生涯譲る事は無かった。より民主主義形態に近い政治形態は、独裁体制の前に脆くも崩れたと言えそうである。政權獲得後、大躍進の失敗で国家主席を劉少奇に渡した後、共産党主席の権力奪回の過程は、秦の始皇帝や漢の武帝の振舞いと同一である。

(註57) 杜周としゅうの言動は、中島敦に拠れば以下の如くである。「常に帝の顔色を窺い合法的に法を枉げて帝の意

を迎えることに巧みであった。ある人が法の権威を説いてこれを詰ったところ、これに答えていう。前主の是とすると、これが律となり、後主の是とするとこれが令となる。当時の君主の意のほかになんの法があろうぞ。」(「李陵」二)、支那皇帝の意は、天の命である。そして、皇帝権限は、封禪の儀という秘密儀礼で齎された物だ。秦の始皇帝が、始めた皇帝の絶対権威は、現在の支那に引き継がれている。中ソ路線対立が激化し、核戦争を危惧した毛沢東が、北京市内の地下を要塞化したのは最近の事である。朝鮮戦争の宿敵である米国との和解も、当時半身不随の共産党主席のうわ言から始まった。天の命を受けた絶対者には、暗殺者が付き纏う。始皇帝には、博浪沙で滄海公をして鉄鎚で攻撃した張良があり、燕の太子丹の命を受けて易水を渡った荊軻が有名である。「風蕭々として易水寒し、壮士一たび去ってまた帰らず」である。毛沢東には、側近第一の林彪による暗殺計画があった。一身を犠牲にして天命を変えようとする者が、跡を絶たないのは易姓革命の国ならである。

皇帝に仕える佞臣の立場も更に危険なものだ。皇帝の権限移行、さらには易姓革命で財産も、さらには一族郎党諸共に殲滅させられるからである。私的な想い出だが、一学生だった頃、個人的な講義を受けていた学識豊かな老教授が、大学の経営者から厳しい叱責を受ける場面に遭遇した事がある。私自身は、机に打ち伏して三十分程仮死状態を装った事があったが、しがない研究生であった私から見ると、その経営者と仲間三、四人の教員こそ傍若無人な振る舞いで万死に値すると個人的感想を抱いたものだが、学部四年間、教員の研究室に泊り込み共産主義思想で武装した一学生は、大学院七年間を同一範疇のイデオロギーで思想教育を受けた後、私立大学の教員に成った。現在の彼に取っての職場は、さながら「死の家の記憶」のようである。彼は、人生で初めて本物の他者と出会った訣である。高文謙「周恩来秘録」(「文藝春秋」上、下)は、皇帝毛沢東に仕える丞相の振舞いを暴いている。来日した著者に、週刊誌の対談で一日本人が、宰相は皇帝を諷める役目があった筈であるという、愚かな質問をしていたのが記憶にある。以下も私的な記憶であるが、若者向け週刊誌で、人生相談を担当していた在日朝鮮人作家立原正秋は、有力な先輩の尻に就いて、忠勤を励む事を奨励していた。何故なら、そうする事で利益を得られ、得をするからであるという説明であった。立

原正秋自身は、そうした事も無く、今後もその種の人生とは無縁であるという、本人の弁であった。私自身も個人的には、立原正秋の生き方を踏襲したいと思っている。

(註58)中華教徒である蘇武は、匈奴に降った李陵に対して憐愍の情を示す。少なくとも匈奴の右校王となった李陵は、虜囚の蘇武に対して引け目を感じる。その意味する事は何か。「襁褓をまとうた蘇武の目の中に、ときとして浮かぶかすかな憐愍の色を、豪華な貂裘をまとうた右校王李陵はなによりも恐れた。」(「李陵」三)、辺境の地に絶望的な人生を生きようと都長安に帰還出来る可能性を秘めている限り、高い自尊心を持ち得るという事か。先に述べた如く文官である蘇武には、匈奴社会に同化する能力が無い。武人である李陵とは個人の資質が違うのである。しかし、乞食生活を送る蘇武は、匈奴の王侯と成った李陵に対して優越感を示す。匈奴社会で虜囚と成っても中華教徒としての矜持が、周辺に対して優位を示す。武の優位者は、文化的な高貴な気風に圧倒されるという事であろうか。松本清張「赤い籤」(「オール讀物」昭和三十年六月)は、荒涼たる朝鮮全羅北道高敞での孤立した戦時下の日本人社会で、名門女子大学卒業の美貌の人妻が、サロンを主宰するも敗戦と共に慰安婦に転落する話である。典雅な社会秩序の崩壊と同時にロココの文化体現者が、圧倒的な武力に屈服する。優雅な文化体現者は、武力を行使されたら脆くも崩れるが、平時では常に優位に立つという主旨である。映画「ダンディ少佐」では、華麗な軍服のナポレオン三世の軍隊は、米国のならず者集団に潰れる。悲壮美に溢れた制服の独逸陸軍は、ラフな服装の米国軍に敗北した。勝本清一郎「雁-森嶋外-」(「日本の近代文学」昭和四十年十二月)に拠れば、森嶋外「雁」は、クラウゼヴィッツ「戦争論」の応用篇である。招来を囑望されて、独逸留学を成す帝国大学の医学生岡田をしがない小使いが見返す話である。嫉妬とやっかみの中華社会で生きた蘇武は、中華社会に対する帰還の術、あるいは匈奴社会での生き抜く術を心得ていたと言うべきか。過当競争の憎悪の社会では、孔子の言うように容貌愚なる人物のみ生存を許されるという事かも知れない。嘗て大学院入試に失敗し、他方面に生きる事になった美貌の同輩に対して、故人になった国語学の教授は、容姿端麗の者は研究職に向いていないと訓戒していた。

「漢人のいう礼儀とは何ぞ?醜いことを表面だけ美

しく飾り立てる虚飾の謂ではないか。利を好み人を妬むこと、漢人と胡人といずれかはなはだしき？色に耽り財を貪ること、又いずれかはなはだしき？表を剥ぎ去れば畢竟なんらの違いはないはず。ただ漢人はこれをごまかし飾ることを知り、我々はそれを知らぬだけだ、と。」(「李陵」三)、簡単に言えば文化水準が高くなると虚飾に溢れ、偽善に充ちるが、その種の世界は辺りを睥睨して、周囲に君臨出来るという事か。中華社会は、周辺蛮族の侵攻を許して屈服するも、征服者は最終的には文化水準の高い中華文明に同化し、雲散霧消してしまう。文化水準の高い仏蘭西は、野蛮な独逸に敗北し、独逸は無法の国、露西亜に屈服している。現地採用の松本清張は、朝日新聞本社帰還の高学歴の幹部の多くを小倉駅街頭に見送った思い出を回想し、東京転勤を成した自分の栄光の人生を噛みしめている。私個人は、東京の教育会で鼠の如くに這いずり回って生きて来た者が、沖縄に来た瞬間にいけ猛々しく成る事例を多く目撃している。最近の例では、尖閣問題、竹島問題で中国、朝鮮の人々が反発するのは、こうした日本人特有の国民性があるように思う。密度の濃い東京の大学で、学会で、五十年間貴公子、プリンスと呼称された人物も辺境の地に降りたった瞬間、その言動、行動は夜盗のそれと何等変わらない。

(註59) 中島敦「山月記」で虎に変身した李徴が妻子と遭遇して、それと知らずに餌食にした後に、真実を知って後悔したらという挑戦的な意見がある。同様に「李陵」が、戦意高揚期ではなくて敗色濃い日本で執筆されたら作品構図は変形していたであろう。しかし、大東亜戦争初期に執筆された「李陵」は、文弱の徒に拠って創作された作品ながらも、日本民族の一大悲劇である先の大戦の精神高揚と皇軍兵士の運命を残酷な程に暗示している。

日本帝国の南方侵略は、東京裁判を主催したマッカーサーが、朝鮮戦争後に米国会の公聴会で断言した如くに、自衛の為の戦いであった。大東亜共栄圏のスローガンは、後知恵の理屈である。しかし、末端の兵士の中には戦争の大義に殉じた者もいた。蘇武が司令者である漢の武帝の命で辺境匈奴に派遣されるも、再度中華教徒として生還したように成らなかった事が、皇軍兵士の悲劇である。天才作家三島由紀夫は、「英霊の聲」で昭和天皇の「人間宣言」に対して呪詛の言葉を投げかけた。「英霊の聲」の主役は二人で、二・二六事件で銃殺に成った将校の霊と神風特別攻撃隊の霊魂であ

る。北一輝「日本改造法案大綱」の実現は、戦後の進駐軍の権力で達成されたと考えた三島由紀夫は、貴族と不在地主のような愚劣な物を消滅させる為に犠牲に成った者に対して、天皇の大権の栄誉を与えるべきだと主張した訣である。「常に爾臣民と共に在り」(「終戦の詔勅」)が、戦後日本の復興に果たした役割は大きい。国体の変質しても同一の天皇の存続で民族の一体感を保持し得たという前提で、三島由紀夫「文化防衛論」が執筆された。ロシア革命の過程で強靱な少数の共産主義組織の攻撃で圧倒的多数の民衆が、各派攻撃され粉砕された。同一の強固な集団組織である「楯の會」の設立である。

十九年に及ぶ辺境での虜囚の後に蘇武は、中華教徒としての信条を捨てる事無く無事、命令解除の命令を武帝の後継者である漢の皇帝から拝命して祖国に帰還し、栄誉を以て遇せられる。天皇の「人間宣言」は、戦死した皇軍兵士の靈魂を裏切ったと考えた三島由紀夫は、「英霊の聲」で異議を唱えた。さらに祖国敗戦の後に「常に爾臣民と共に在り」と呼びかけた天皇の存在そのものが、共産革命により消滅しかねない状況下で「文化防衛論」が、執筆された。この理論の延長で民間防衛組織「楯の會」の設立が成される。「楯の會」は、共産革命軍の武力攻撃から天皇個人を守り、国体としての日本精神を實力で防御する為の武装集団である。民間の少数精鋭の強固な武装軍隊設立に示唆を与えたのは、楠木正成の千早城攻防戦である。日本精神、文化の体現者である天皇の消滅は、民族滅亡を招く、危機意識から「文化防衛論」が生まれた。国内の武装共産軍を殲滅する武装集団としての「楯の會」は、「葉隠入門」「革命哲学としての陽明学」の思考の延長行為である。三島由紀夫の脳裏にあったのは、ロシア革命での皇帝一家の惨殺で、反ボルシビキの統制が混乱し統一が取れなかった事が、示唆を与えた。「最後のロシア大公女マリア」(「中公文庫」平岡緑訳)には、アレクサンドル三世の姪が、赤軍に警備された国境を辛くも脱出する場面が、スリリングに記録されている。日本全土が、この種の状況に陥ってからは手遅れである。こうした状況に成る直前に「楯の會」が、武装蜂起するという設定である。「蘭陵王」は、「烏帽子狩衣が似合いそうな」京都から来た公家風的美貌の青年が、共産軍との戦闘での戦死の決意を語る一篇の佳作である。

(註60) 孫樹林論考に拠れば、漢の武帝時代のイデオロギーは董仲舒者である。それに拠ると武帝は、「百家を禁じ

儒学を尊ぶ」献策を受入れ「黄老の学」(黄帝、老子)に
拠る政治を変更し、帝王の絶対統制の政治体制にし
た。「道の如何なる大きいものでもみな天から出たも
のゆえ、天が変らなければ道も変らない。」「天子は天
から命を授けられ、また天下は天子から命を授けられ
る」(「漢書」董仲舒)という論説が根拠の、帝王の絶対
統制政治である。